

Architecture / Design / Education / International Exchange

NICHE

Vol.48

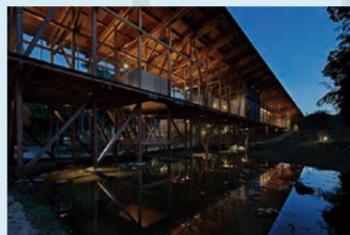
工学院大学建築系同窓会誌 2025

<http://niche-alumni.com>



CONTENTS

03	編集長挨拶	高木雅行 / 建築系同窓会会長
04	NICHE Topics	<p>校友女性躍進賞表彰 酒井和子 (化学系同窓会) 橋本沢子 (建築系同窓会) 坂口教子 (機械系同窓会)</p> <p>工学院大学校友会 創立125周年記念式典 一級建築士合格者数大学別ランキングで6位</p> <p>新刊情報</p>
06	新しい風	<p>インタビュー</p> <p>どこまでも人間のための建築を 山崎健太郎 山崎健太郎デザインワークショップ主宰</p>
20		<p>ヘリテージマネージャーの役割を果たすための ネットワーク構築の重要性 工学院大学総合研究所教授 後藤 治</p>
22	NICHE Gallery	<p>山形 最上川沿いにある三つの風景</p> <p>①山形のかたち 風景に気がつくとき 本間利雄設計事務所 代表取締役 本間 弘 本間利雄設計事務所地域環境計画研究室室長 照井 洋悦</p> <p>②最上川舟運豪商の蔵と屋敷を再生 やませ蔵美術館 二宮設計事務所 代表取締役 二宮 正一</p> <p>③建物再生は記憶を繋ぐ 株式会社ヤマムラ 取締役 企画開発部長 中村 出</p> <hr/> <p>保存と活かす能力 ヘリテージマネージャーへ 柴設計 代表 柴 睦巳</p> <hr/> <p>石場建て古民家の限界耐力計算による再生 ARCHI-CONNAGE [アーキコング] 一級建築士事務所 橋本 健一 / 橋本 沢子</p>
50	NICHE Focus	<p>伊藤文四郎回顧展 工学院大学建築系同窓会副会長 / スタジオ香川 香川 浩</p>
54	同窓会賞 2023年度受賞者	
60	白樺湖「夏の家」	



表紙の写真 撮影：黒住直臣

「52間の縁側」山崎 健太郎 / 山崎健太郎デザインワークショップ
日本建築学会賞(作品)、JIA日本建築大賞、
グッドデザイン大賞内閣総理大臣賞 受賞

編集長挨拶

新しい風 山崎健太郎教授へインタビュー

前号のNICHE TOPICSでご紹介した山崎健太郎氏が2024年4月より新任の教授として工学院大学に戻ってられました。海外出張直前の多忙な中、インタビューを受けていただき記事としてご紹介します。(6ページ)



ヘリテージマネージャーをご存知でしょうか



1995年1月17日、阪神淡路大震災が発生しました。建築系同窓会では被災した工学院大学校友会兵庫県支部へ

工学院大学校友会の会費が卒業後10年を経過後より年会費へ移行

1991年以降卒業時に校友会費20,000円、同窓会費10,000円を納入いただき、すべての住所判明者宛に会誌等の郵送や、学園、学生の皆様に様々な支援を行ってまいりましたが十分な支援が叶わなくなってきました。上部組織の校友会では昨年より卒業後10年を経過した会員の皆様へ年会費の納入をお願いすることとなりました。

現在、建築系卒業生数は24,865名。その内、現在住所判明者は12,020名です。残念ですが住所判明者は長年横這い状態です。今後は幅広い世代の卒業生が集えるよう発信力を高め、各同窓会の枠組みを超え新しい校友会として再出発をする時を迎えていると考えます。各同窓会が一体となり、母校発展のかなめとなる新しい校友会を、皆さんとともに築き上げたいと考えます。

建築系同窓会では同窓会費を納入していただいた会員の皆様へ印刷版のNICHEを郵送させていただきます。同窓会へのさらなるご支援をよろしく願いたします。

100万円を災害義援金として支援。阪神淡路大震災現地調査援助金300万円を建築学科の被害調査費として支出しました。

この震災により多くの歴史的建築物に被害が発生し、様々な専門家が尽力しましたが、その相当数が失われました。2025年はこの震災から30年。現在、歴史的建造物の保存活用に関する専門知識を持つ建築士等の専門家(ヘリテージマネージャー)を育成するための講習会が各地で行われております。

今回NICHEでは卒業生の皆様が各地で取り組む保存活用の取り組みを紹介いたします。



高木 雅行 Masayuki Takagi

一級建築士。設備設計一級建築士。まちづくり専攻建築士登録ランドスケープアーキテクト ヘリテージマネージャー

1955年茨城県生まれ。1982年工学院大学大学院修士課程建築計画学専攻 修了。1982年~1995年株式会社 SUM 建築研究所、1995年~現在 有限会社アルキノバ 代表取締役、1998年~2005年工学院大学建築学科非常勤講師。1992年~2001年、2020年-現在 工学院大学 建築系学科同窓会 会長。1992年~2007年工学院大学校友会 副会長。2021年~現在 校友会理事 1993年~2008年 学校法人工学院大学評議員。2002年~2005年学校法人工学院大学評議員会 議長。2002年・2007年・2008年グッドデザイン賞。2022年グッドデザイン賞ベスト100。2011年・2013年JIA25年賞。2018年・2020年 JIA25年建築選。2023年 JIA環境建築大賞

01

校友女性躍進賞表彰

酒井 和子(化学系同窓会)
橋本 沢子(建築系同窓会)
坂口 教子(機械系同窓会)

2024年10月31日、学園創立137周年記念式典が新宿キャンパスにて開催され、本学校友女性で社会的な活躍をされている3名に校友女性躍進賞の表彰が学園からありました。

校友女性躍進賞表彰は、本学校友女性の社会的な活躍の認知度を高めることを第一の目的とし、更に本学に在学する女子学生に対する男女共同参画と社会貢献への意欲の涵養を第二の目的として、工学院大学を卒業した女性で特に社会において活躍している方を表彰するものです。工学院大学名誉教授・小野幸子氏、工学院大学名誉教授・荒井純一氏からのご寄付により、副賞が授与されました。



左から橋本 沢子さん、小野 幸子先生、小澤会長、坂口 教子さん、酒井 和子さん

02

工学院大学校友会
創立125周年記念式典

第58期(2023年度)建築系同窓会報告会兼意見交換会が2024年5月26日に、26名の出席のもと開催されました。

第58期(2023年度)の事業実績・決算及び第59期(2024年度)の事業計画・予算が了承されました。

当日はこれに先立ち、一般社団法人 工学院大学校友会 定時総会が行われました。

また、意見交換会終了後に「工学院大学校友会 創立125周年記念式典」が行われ建築系同窓会を含む各同窓会宛に感謝状贈呈が行われました。



建築系同窓会報告会兼意見交換会

感謝状贈呈

03

一級建築士合格者数
大学別ランキングで6位

国土交通省から2024年度一級建築士試験「設計製図の試験」合格者が発表されました。

工学院大学出身者の合格は61名。学校別合格者数では6位となりました。

工学院大学建築系同窓会では、会員の皆様の資格取得を支援すべく、資格学校と提携し会員は特別価格にて受講することができます。詳しくは同窓会HPをご覧ください。

令和6年 学校別合格者数一覧(10位以内)

順位	大学名	合格者数
1	日本大学	142名
2	東京理科大学	103名
3	近畿大学	92名
4	芝浦工業大学	84名
5	早稲田大学	66名
6	工学院大学	61名
7	神戸大学	54名
8	明治大学	52名
9	名古屋工業大学	45名
10	法政大学	43名

※「学歴」を受験資格として申し込んだ者のみ的人数である。したがって、「二級建築士」等を受験資格とした者は、上記学校の出身者であっても含まれていない。

海外建設コンサルタント育成プログラム

Training Programme for Overseas Construction project Consultant



海外建設コンサルタントとして今まで経験してきた案件を基に、自分の子孫を含め海外で働くことを目指す若い人たちの為に、多少なりともその指針になればと思ってまとめた書籍です。ぜひ、手に取ってご覧いただければと思います。

【内容構成】

Part-1 基礎知識 -技術知識及び技術英語 Technical Knowledge & Technical English	Part-3 案件事例集 -問題解決編- Case Study -Problem Solution-
Section 1 技術知識 Technical Knowledge	Section 1 問題に取り組む姿勢 Attitude
Section 2 技術英語 Technical English	Section 2 拠点立ち上げ Local Presence
	Section 3 施工監理 Executive supervising
Part-2 実践編 -コンサルティング Consulting	Section 4 客先折衝及び調整 Coordination with the Recipient
Section 1 コンサルティング Consulting	Section 5 下請け監理 Sub-contractor's Control
Section 2 提出書類 Submission Document	Section 6 事務所運営 Office Operation

【著者】北原 金彦 【出版社】Amazon Direct Publishing
【金額】\$ 17 (約2,600円) 【ページ数】305頁 2024年3月1日発行

『さいたまの長屋門』江戸の記憶を訪ねる



『さいたまの長屋門』は2020年から3回にわたり、日本民俗建築学会誌『民俗建築』に、「さいたま市に在る長屋門」の調査実測した論文を発表し、それを基にまとめたものです。農村地域の長屋門はかつて茅葺屋根で、建物は村役人(名主など)や豪農の屋敷の表門です。中央部は入口でその両側は番所や使用人などの居室や収納庫などになっています。さいたま市には長屋門が点在していることを知り、それはどの地域にあり、何棟くらいあるのか、そしてその構造などの調査を始めることになりました。市には文化財指定の長屋門が7棟あり、その調査報告書や『大宮の長屋門』の

冊子には、棟数や詳細が書かれていましたが、この他に詳しい資料は見つかりませんでした。そこで所在をチェックし現地を訪ね、所有者に当方が実測調査をしたい旨のお願いをし実施しました。その結果をもとに、棟数やその形式の分類、伝統構法の長屋門の構造などの特徴を分析し、入口部と左右のウイング部(部屋)の木組みの違いを模式図に表しました。また入口部の木組みは木割(匠明)によるものか、外観の壁面は黄金比や白銀比なのかなど分析を試みました。ご高覧頂ければ幸いです。

【著者】植木 秀規 ※1964年卒業(武蔵研究室) 【出版社】南風舎 【金額】1500円+税
【ページ数】94頁 2024年10月30日発行

マンガを使って分かりやすく解説した

連載を執筆 月刊誌『建築知識』

2023年2月号 vol.38から2024年5月号 vol.53に掲載



工学院大学建築学科を卒業して東京都職員になった私は、大田区に配属され、そこで保育園や児童館の営繕工事に係る業務を行ってまいりました。現場を見ることが好きだった私は建築行政への異動を命ぜられ、不本意ながら建築基準法を学び始めました。構造審査、狭あい道路指導、違反指導などを行った後、建築主事として10年間余り建築確認の決裁を行ってまいりました。私は建築行政部署において、公法である建築基準法は、国民の生命財産を守る「最後の砦」であることを実感いたしました。

退職後は、ビューローベリタス・ジャパンという指定確認検査機関に勤め、現在に至っております。私は現在ここで、建築知識という月刊誌のボン太くんシリーズで、建築基準法関係規定について、マンガを使って分かりやすく解説した連載を執筆中です。これにより、少しでも建築法規の諸問題にお悩みの、建築設計士の方々のお役に立てたらと考えております。また、全国で活躍中の工学院大学建築学科の卒業生の諸氏にもお読みいただき、少しでもお役に立てたら幸いに存じます。

ビューローベリタス・ジャパン株式会社
シニアアドバイザー

津田 正明

どこまでも人間のための建築を。



Kentaro Yamazaki



山崎健太郎 山崎健太郎デザインワークショップ

Profile
2000年工学院大学建築学科 建築デザインコース卒業 澤岡研究室
2002年工学院大学大学院修士課程修了
2002年、株式会社入江三宅設計事務所入所。その後独立し、現在山崎健太郎デザインワークショップ主宰
2024年工学院大学建築学部 建築デザイン学科 教授就任
国内外で多数の受賞歴があり、地域みんなの居場所である高齢者サービス「52間の縁側」では、2024年日本建築学会賞(作品)、2023年JIA日本建築大賞、グッドデザイン大賞 内閣総理大臣賞の三賞の史上初、同作品における受賞を達成した。また近年では、2023年に日経アーキテクチャ「編集部が選ぶ建築イノベーターズ2024」で2023年に活躍した10人として、2024年には「現代の肖像」(AERA、朝日新聞出版)として取り上げられ、テレビ番組においてその建築が特集されるなど(新美の巨人たち、テレビ東京)、各所において注目を集めている。

2024年4月に新たに工学院大学建築学部建築デザイン学科教授に就任された、山崎健太郎先生に様々な賞を受賞した「52間の縁側」についての取り組み、学生時代の思い出、これからの学生に期待すること等、をお聞きしました。

暮らしの中にある介護

高木 本日はお忙しい中、ありがとうございます。山崎先生は2024年に新任の教授として、工学院大学に戻っていただきました。本当にありがとうございます。

また、日本建築学会賞、JIA日本建築大賞、グッドデザイン大賞 内閣総理大臣賞の賞を同時に同じ作品で受賞するという快挙も達成されています。本当におめでとうございます。

山崎 ありがとうございます。

高木 昨年末、テレビ東京の系列「新・美の巨人たち」で先生の設計された「52間の縁側」を通し、先生の建築や取り組みがご紹介されました。見逃した方もいらっしゃるかと思いますので、それはどのような背景、またどういった経緯でつくられたかをご紹介いただけますか。

山崎 「52間の縁側」という建物はサービスセンターです。特徴として、普通はクライアントと

いう対象がはっきりしていますが、このプロジェクトの場合には、その他にも関わっている人たちがたくさんいらっしゃいました。NPOの人、地域の農家さん、あと鍛冶屋の人がいるとか、女性が多かったですが、とてもワイルドな保育をやっている保育園など、いろいろな人たちがいました。もちろんクライアントのご要望は当然ですが、そういう人たちの声も耳に入ってきます。

「こういうサービスをやるんだ」というのであれば、例えば「畑をやったらどうか」とか「ヤギを飼ったらどうか」とか「子どもたちを連れてきていいの」とか。カフェを計画していますが、そこに食材の調達を手伝ってあげる、人を紹介してさしあげるなど、関わる人たちがたくさんいたような気がします。テーブルを囲んで会議をやるということでは全くないのですが、不思議にもそういう人たちが周りにたくさんいらっしゃいました。それはプロジェクトの特徴だと思います。

サービスのクライアントである石井さん

は、とてもユニークな介護をしています。通常サービス、福祉施設は、市街地の中には少なく、今回のように市街地調整区域という、基本的には建築ができない所にも福祉施設は建てられます。認知症の人たちや、障がいを持った人たちがそこで日中過ごしています。

しかし、彼らがやりたいのは日常の普通の暮らしです。スタッフさんの子どもとか、外国人のスタッフがいるとか、彼らはごちゃ混ぜケアと言っていますが(笑)、そういうとてもにぎやかな暮らしの中にある介護というのを望んでいます。そういう人たちだからこそ、地域の人たちとコミュニケーションをとり一緒に暮らしをつくらせていくことが理想なのではないかと思いました。彼らもそう思っていたと思います。そういう経緯があって、建築のスタートをきりました。

高木 通常はやはり介護施設を運営する側の建



高木雅行 建築系同窓会会長



52間の縁側

撮影:黒住直臣



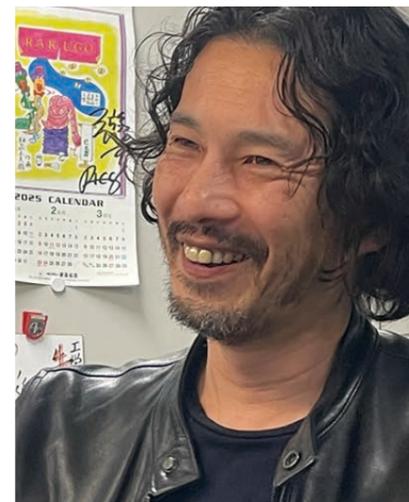
ンのワークショップをやらせていただきました。

アーバンデザインだから建築のプログラムではありません。いろいろな国の学生がいてイタリア、コペンハーゲン、パークレー、日本の人たちと、ワークショップをやりました。自分の建築をつくろうと思った時、苦しいのですが、それが楽しいという瞬間がありますよね。だから、時に一人で外に出ていろいろなことをやってみる糧にしていく。自分だけの世界ではなく、今までとまったく違うバックグラウンドの人たちと一緒に対話をしながらものづくりをしていきました。

非常にいいと思ったのは、建築学科の中で評価されがちなのは、ユニークで特徴があって、思いつかないようなものをとて面白いとか、あるいは逆にそういうのは駄目というのがあって…。しかし、パークレーで感じたことは、そんなことはちっとも大事ではなくて、もっと普通にみんながいいと思えることがいいということです。ですから会話ができるんです。

賛成、反対等様々な議論があって、それがとても気持ち良かったと記憶に残っています。要するに、最初から答えが分かっているのではなくて、話をしながらみんなでクリエーションしていくというのが、非常に良かったと思っています。

それをデザインワークショップと言っていたし、みんなが考えを見つけていくためにスケッチを変えてみたり、大きいテーブルの上に絵を描いていくと、みんなの考えがそちらに向かって収斂(しゅうれん)していくということがあったのを、非常によく覚えています。それはきっと、さっきお話に挙げさせていただいたような、52間の縁側というものの感覚ととても近いと思ったし、本来建築をつくるというのは、



築の制限が出たりしてしまいますね。そういうことにとらわれないでさまざまな意見が出るというのは、素晴らしいですね。

いわゆる老人ホームの設計をさせていただいている関係で、びっくりした施設だとテレビを見て思いました。

山崎 通常、大きな機能訓練室とよばれる場所にテレビがあって、同じ介護度5の人が車いすで扇形状に並んで、みんな半分口を開けながら天井を見ているというのが、デイサービスや特別養護老人ホームの姿であるかもしれません。私は以前、保育園の設計をしていたので今でもたまに行くのですが、その同じ社会福祉法人の特養を見ると、やはり胸が痛くなります。人の暮らしとは、かけ離れていると思ってしまいます。

この縁側に関わっている人たちのどういう声を聞かかというのにはあるにせよ、そこは暮らしが大事だとみなさん思っていて、そういう場所をつくっていくというのが、プロジェクトの一番の目的でした。

周りにいる人たちが素晴らしい

高木 一般的な老人ホームなどを設計すると管理しやすいというか、外で徘徊しないとか、こちらから「ヒーリングガーデンのようなものを作って、一緒に車いすで回れば素晴らしいですね」と提案していても、実際には鍵をかけてしまっただけで管理しやすいということではできないのは、とても残念だと思います。

山崎 建築がすごいのではないということです。ク

ライアントを含め、周りにいる人たちが素晴らしいのだと思います。

高木 そういう人たちの巡り合わせで縁ができていたというのも、それまでの仕事からのつながりかもしれませんね。

山崎 運がいいということなのかもしれません。しかし大事なことというか、使い勝手がいいもの、管理がしやすいものも大事ですが、それが一番ではないということです。今、社会全体が変わりつつあります。変わっていく時に、設計する側の人たちがそれに応えられていないということもあります。また、使いやすい、管理しやすいもの以上のものを、分かっているにもかかわらずもらえないということがあります。

みんながいいと思えることがいい

高木 建築家がこうだと提案することだけではなく、一緒に環境、施設をつくり上げていく方向に、うまく流れがいったということですね。さかのぼって、先生が学生時代はどのような生徒だったのかについてお話ししていただけますか。

山崎 あまり覚えていませんね。たぶん普通です。(笑)みんなと一緒にです。(笑)でも、割と真面目だったと思います。取り立てて言うこともそんなにありません。しかし、覚えていることはもちろんあります。

アーバンデザインの倉田先生にアメリカのサンフランシスコのパークレーでアーバンデザインワークショップのプログラムに、連れていってもらいました。それでしばらく、向こうでアーバンデザ



そういうことなんだろうと思いました。

人々にとっていいと思えるものを創造できるとか、もう少し日常の暮らしを支えていけるような建築がいいのではないかと考えています。きっかけはそういうところがあったような気がします。

作品を巡る旅 興味のあるものを探していく

高木 そういうさまざまな人との対話とか、やりとりをしていく中では、いろいろなことに気付かされますね。貴重なご経験をされて、次のお仕事につながっていったんですね。

山崎 学生のころ、夢とかどんなテーマがあったとか、ほとんど考えなかったと思います。若者らしくないかもしれませんが、自分で夢を見つけてそちらに向かって頑張っていこうとは、思っていなかったと思いますよ。しかし、自分が非常にワクワクするようなものというのは、あったと思います。そういう具体的な目標のようなものは、あまり持っていなかったような気がしますが、好奇心は非常に強かったと思います。知らないものを知りたいとか、好奇心とか探究心は常にあったと思います。

高木 同窓会でも、以前、海外に行った方に資金援助する代わりに『NICHE』に原稿を書いていただくこともやっていました。そういったことが経験につながって留学される方もいました。やはりそういう機会があると、今までと違う視点で気付かされるということもあるのでしょうね。

山崎 それは非常に大事なことだと思います。ただ、自分のキャリアのために留学するのは面白くないですよ。興味のあるものを探していくというこ

とが大切だと思います。学生の時も、そういう意味で、私は旅が好きだったと思います。じゃあ留学と旅ってどう違うのかということかもしれませんが、(笑)旅はよかったです。

海外に行くって、留学でも何でもいいのかも知れませんが、私の研究室の澤岡先生が、東大のランドスケープの三谷先生の講義に出られた際に、三谷先生の言葉が自分と同じだったと教えてくれました。それは「いいデザインをするにはどうしたらいいですか、できるようになるにはどうしたらいいですか」という学生の質問に先生は「作品を巡る旅をしたほうがいいよ」と答えられたそうです。

高木 ちょうど私も大学院の時に、バックパックを背負いヨーロッパを45日間旅してきました。成田に着いた時は200円しかお金がありませんでした(笑)。

山崎 それはいい経験ですね。(笑)

高木 それはとてもスリリングで、行くところどころ風景がまったく違う。住んでいる人たちの性格もまったく違いました。ドイツに行ったとき学生に一言聞くと理路整然と「私はここから南の何キロ先からバスで来ました」という答え方をされて、やはり旅をしてみると、出会う人たちが全然違う生活、あるいは様々な考えをお持ちだなというのを、とても肌で感じたことがありました。やはり旅というのは大事ですね。

山崎 若い時の貧乏旅行は最高ですね。(笑) お金がなくなった話とかいいですね。そういうのはとても大事だと思います。私は、今の高木さんの話に大賛成で、一人で旅をしたことがあるか、ないかは人生観がわかるような貴重な経験になると思います。

高木 ほんとうにそう思います。(笑)

山崎 貧乏してお金がなくとも楽しめるかどうか、お金がなくともちゃんと無事に帰ってこれるセンスがあるかというのは、とても重要な能力の一つです。

生きていくうえで心奪われる風景があることの大切さ

高木 イタリアからギリシャに渡る船で、もうお金が日本円に換算して2万円ぐらいしかありませんでした。船の中で初めて会う日本人に「たばこ食べ物交換させてください」と物々交換をせまったりしました。文化庁から海外留学で舞台美術の研修のためにイタリアに来ている人でした。そのような巡り合いで友だちになったのは、とても良い経験

でした。

山崎 そういうのは最高ですね。お金のあるなしとか、なんかドキドキしますね。トラベルという語源はトラブルだから、もう若い時に一人旅した武勇伝をみんな持っていたほうがいいと思います。若い時はそういうトラブルみたいなものを求めていくところもありますし、本当に忘れられない風景に出会うこともありますね。それは大きな財産なんだと思っています。

大学4年生の時にインドに行ったのですが、インドのパラナシのガンジス川、あの風景はやはり忘れられません。今、生きていてそういうものに支えられているかという、そんなことは全くないけれど、ふとした時に思い出します。心奪われる風景がある、生きていくうえで非常に大事だなと思います。あれは忘れられません。

人間も自然の一部であると認識することの幸せ

高木 さて、卒業された後、設計事務所でお仕事をするようになったわけですね。実際にお仕事をするようになって、今までと違ったことを感じられたか、あるいは学んだかというのはありますか。

山崎 もちろん建築の設計の仕方を大学で教えてもらうようなこと、学ぶことは全然違うということを経験しますね。建築確認のことや、コストのコントロールや品質管理、あるいはクライアントのお付き合いの仕方とか、さまざまなことがありました。私は組織事務所で働いたのですが、それはさっき話したパークレーの影響があったと思っています。

それは1人で自分の世界だけで建築をつくるのではなく、広い世界でやってみたくて思ったこと





でした。大きいプロジェクトがあれば、構造のエンジニアとか設備のエンジニアとかランドスケープの人、まちづくりの人と一緒にすることが出来ます。それは建築雑誌に載るようなものではなくても、そういうプロジェクトをやることは非常に面白いことだと思います。

親切な人たちがたくさんいて、いろいろなディテールを教えてください、お酒を飲みながらでも多岐にわたることを教えてください、それがとても貴重でした。

高木 私も、そういう開発行為とか環境アセスメントに係るようなプロジェクトもさせてもらいました。やはり自分の足で山を歩き、敷地を歩き、実際は現場が進行していくと構造の専門家、それから現場では大工の親方とか石の親方とか、その人たちから受ける印象にはとてもびっくりしました。

山崎 そうですね、高木さんの神山のお仕事は素晴らしいですね。これは確か田瀬さんとか山田さんでしたね。そうした方々の持っている世界観はとても共感します。もともとある大きな里山のこととか、自然を人間の都合で考えるのではなく、自然の視点からものが見られるかどうか、人間が住む環境をつくるお仕事ですね。

建築の設計者がやれることというのは、本当にこういう大きな環境のごく一部であって、これをもう少し確からしい世界にしていきたい時に、アクロス

福岡をやられた日本設計の浅石さんからは田瀬さんとのそういうやりとりをよく教えてもらっていたと聞きました。やはり彼らの持っている広い世界と、建築のエンジニアが結び付いて広い世界の環境の一部をつくれるというのは、きっとすばらしいことです。

この仕事は、人間がどうやって生きていくのかということを考えられると思います。それが人間側からだけの視点ではなくて、もっと人間も自然の一部であるということ認識することが大切なんだと思います。田瀬さんのお仕事とか、山田さんのお仕事は木材、環境、などから考えても、誰にとっても良いものをどのように扱えるかだと思います。

人間の暮らしを支える建築

高木 先生の研究室がスタートしていますが、「複雑な現代社会の中で、建築をつくるための研究」とは具体的にどういうことを目指し、どのような研究室にしていきたいか、お聞かせいただけますか。

山崎 複雑な現代社会の中で、里山の環境とか資源とか、福祉の世界であつたら管理、コンプライアンスとか、やはり建築をつくっていくことは難しいです。私は人間の暮らしを支えるようなものは絶対必要だと思います。

お金をどんどん生んでいくようなものではなく

て、そこに住んでいる人たちの暮らしを支えるようなもの、居心地がいいとか、何年たってもここは自分の場所だと思えるもの、この言葉は全く新しい言葉ではないけれども、今のような社会の中でこそ必要なものです。そういうものを求めている人は、たくさんいると思います。

例えば「52間の縁側」でやったことは、福祉施設というものが、人間のためだけの場所にはなっていないということです。これは今の現代社会の中でつくるといことはとても難しいことです。非常に強い慣習という壁がすぐ私たちの目の前に立ちわかってきます。ホスピスのようなものをやろうと思っても、みんなホスピスは亡くなる場所だと分かっているにもかかわらず、やはり亡くなったことを隠したいとか、悲しみは遠ざけておきたいと思うんです。悲しむことが悪いことではなく、本当は悲しむための場所をつくらなければいけない。分かっているのに許されないという現実です。

介護保険制度が2000年に創設され、介護を必要とする高齢者を支える制度として定着しました。それでもやはり幸せとか豊かさというところまでいきません。

政治・経済や制度のようなものは、必ずしも人間の暮らしのすべてを、豊かにするものでありません。しかし、それをやれるのが、建築なんだと思っています。建築は合意していくための非言語のコミュ

ニケーションだから、言葉にするのは難しいですが、居心地がいいというような、自分の生活を確実に支えてくれているものです。それをプライベートだけではなく、もう少し公共的なものの中でつくりあげていくためにはどうしたらいいかと、今、考えています。

今まで仕事上での悩みや難しいことへのチャレンジを常に考えてきました。どうすれば悩みを突破できるか、それを学生と考え、一緒に悩んでいきたいと思っています。それは、研究室の一つの目的でもあります。悩んで突破する自分の背中を見せない、いけないとも思っています。

進化の過程で残ってしまうもの

高木 先生方が柔軟な発想で物事の解釈、取り組むという姿勢を実際にお見せいただくと柔軟な発想ができる学生、卒業生がたくさん生まれてくるのではないかと思います。

山崎 人々の暮らしの願望はつきり見えてきているのに、建築がそれに応えているところが少ないのではないかと思います。

縁側の話だって、ホスピスの話だって、地域の人たちの声は、今振り返ってみれば非常にシンプルです。安心して歳をとっていただける地域社会が欲しいのです。高齢化の問題とか少子化の問題、当然教育の問題も同じです。不登校、障がいの問題、それを共生社会という言葉でまとめられているわけです。

そういう日本が抱えている社会課題が、はっきりと残されているものです。人類は進化しています。進化というのはより良い社会に向かって動いていること、現在は資本主義のシステムの中で問題を解



決していっているところがあります。

例えばブラジルで労働者から搾取するコーヒー豆ではなく、この人たちに適切な賃金が支払われるようなものを選んで買って、それを流通させていこうとか、あるいは同じようにアパレルの業界も労働者からの搾取ではなく、丁寧に作った高品質のものを高単価で売っていく、そういうものを選んでいこう、当然それに対して技術を開発したり機械を提供したり、より良い方向に世界の中の格差を縮めていくように社会が進化している。日本では過酷な労働は減っているし、お腹が空いて野垂れ死ぬこともほとんどなくなりました。社会はどんどん進化をしているのですが、それでもやはり残ってしまっている問題というのは、ビジネスや、政治や仕組みでは解決できないものなのです。建築にはそれができることの一つなんだろうと思います。

複雑な現代社会の中で大学で学ぶというのは、具体的な技術を学ぶということではないですね。例えば、建築を通して社会をどう見られるのかということです。建築を通して人間にどうい眼差しを向けられるか、人間というのはどういうものなのか、生き方とは何なのか、これが分かっているとプロジェクトを進めていっても意味がないように思えるのです。

技術だけが進化して洗練していったとしても、人類の幸福にはあまりつながってきません。快適にはなったかもしれませんが、技術と知識、人間に

対する思い、これをどのように統合、結びつけるか、これから取り組んでいかなければいけないことの一つだと思います。

それには繰り返になります。環境が必要です。環境というのは、まさしく建築が取り組むべき領域の一つですが、これは全て建築だけで解決できるものではないと思っています。そこに向かって取り組んでいくというのは、これからやらなければいけないことです。それを考えるにはあまりにも難しく、具体的に手がかりになるようなものとしては、過去から学ぶということです。その建築の歴史とは、知識とか様式の勉強ではなく、その時、その時にさまざまな人たちが何をどう考え、解決に導いたか、何を望んで、何に形を与えようとしたのかということ、アイデアの歴史として考えていきます。

コルビュジエだって、ミースだって、カール・ペーター・ペーターだって、シンケルだって一緒だと思います。バロックだってロマネスクだって、そういう感覚で建築の歴史を文化として考えてみることに、難しい現代の中で建築とは一体何であるのかという問いかけをしていきたいです。ただ勉強しているいろいろなことに博学になり、知り高ぶったように頭の中で建築を理解することではなく、もう少し自分の生きていく社会のものとして建築を考えてみるとか、それを深く掘り下げてみたりすることとか。さらには、作家を分析したり研究したり、そういうことをやってみるのは地味ですがとても意味のあることです。



新富士のホスピス

撮影：黒住直臣



新富士のホスピス

撮影：黒住直臣

品質管理ひとつで建物の寿命が違ってくる

高木 設計というのはさまざまな視点で見なければいけないので、経験が非常に大事だなと思います。私も大きいプロジェクトに関らせていただいて、現場に行くと、配管が設計どおりにならないとか、斜面で設計図どおりにやったら基礎が出たしまったということを経験したものですから、そういうところまで含めて、さまざまな見方で見られる設計者にならなければいけないと思いました。今日も配筋検査を終えてきました。

山崎 大学ではそのように現場の品質管理を一生懸命やる、必ずやりなさいと言っています。

その意味を考えた時に、コンクリートの被り厚さによっては10年建物の寿命が長くなります。コンクリートだったら100年持つようにコンクリートを打つということに全力を尽くします。しかしその建築が100年持った後に、今考えていることは、もしかしたら全然通用しなくなるかも知れません。しかし逆に言いますと、今の形で成立していなければ、未来にこの建物に関わる人は使い切れません。

例えば、ホスピスの例をお話すると、ホスピスでは痛みを取りながら最期の時を過ごし、大体2ヶ月ほどでお亡くなりになることが多いそうです。亡くなった時に、ご遺体をどこから見送るのかという議論をしました。当然ホスピスというのは、もう亡くな

ることを覚悟してというのが、言葉は適切ではないかもしれませんが、ご自身でそこを終るすまかにしようとして、過ごされるわけです。しかし、いざ亡くなったら、その患者さんを表玄関からは出せずにバックヤードから見送るとというのが、今の病院の運営です。

私は設計者としては反対です。バックヤードから見送ることを「皆さん、本当にそう思うんですか」と聞けば「いやそれは、拍手で見送ってやりたいですよ。」でも、「隣の患者さんやご家族に、不安や恐怖を与えるということには絶対配慮すべきだ」という意見がほとんどです。分かっているけれどもできない。これが先ほど言った、慣習です。

その慣習のリクエストに従えば、設計者はそれに対して従順にバックヤードからストレッチャーでお見送りをするルートをつくります。そしてもう一つ大事なことはやはり表玄関にも導線をつくること。このホスピスの場合にはとても立て込んだ場所であるから玄関に車を付けづらく最初から計画しておかないといけませんでした。きちんと霊柩車を止められ、そこからご遺体を送り出せるよう導線をつくりました。

死生観というのは慣習の話ですが、たった20年、30年前というのは、がんで死ぬということは、医師にとって敗北だと思われていたそうです。でも今はさすがに敗北とまでは思われていません。緩和ケ

アというものが生まれたし、人々の死生観は変わっていくし変化していくものですから、たった20年とか30年で考えも変わるんです。その変化よりも建築は長生きしてしまうから、建築がそれについていけなくなるようなものを、つくってはいけないと思っています。

そうすると、死生観は変わることも考え、設計者はいつかは表から悲しみながらもご遺体を送り出す、みんなでお見送りするような社会がやってくる時のための建築を考えなければ、進化や進歩がありません。

建築家や設計者の責任というのは、とても大きいし、それを認識するようになっていかなければなりません。それは建築の歴史の中から学べるのではないかと考えています。

ガンジス川にみた風景

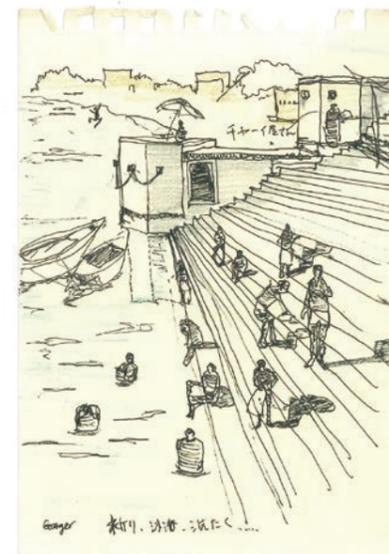
高木 ガンジス川に行かれたことも影響していますかね。

山崎 はい、間違いなく影響しています。

高木 生死感というか、生きる、死ぬという感覚ですね。

山崎 まさにそうです。忘れられない風景とか、心奪われるということは、本当にあるんだと思います。

この縁側での風景というのは、大学4年生の時



山崎氏が学生時代に描いたガンジス川のスケッチ

に見たガンジス川です。ほとりて沐浴、洗濯をしたり、商売をしていたり、いろいろな、いわゆる聖と俗の非常にカオティックな世界です。私にはとても居心地が良かったし、その風景というのは、縁側で多くの人たちが見てみたい世界の一つだと思いました。

そうでないと、地域の人が認知症の人たちと一緒に過ごすということは訪れないし、認知症の人たちを自分たちの暮らしの中から見たくないとか、触れ

たくない存在にしていると、いつまでたっても認知症になることが怖いですから、自分や家族になった瞬間終わりだと思うんです。こういうのはやはり豊かさとは言わないから、ガンジスで見たあの風景というのは、まさにそうであったと思います。

倫理感と想像力の大切さ

高木 大きいプロジェクトをやる時に、社長から「おまえは本当にここに住みたいと思うか。おまえが住みたいと思ったのか」というふうな聞かれ方をしました。その視点というのは大事だなと思いました。寸法一つにしても、当時、斜面の巨大な集合住宅の設計を担当している時だったので、直前に安藤さんが六甲の集合住宅をやっていたのですが、寸法などを見ると非常にコンパクトなんです。自分が設計した時に、廊下にしかならない廊下を作りたくないなど思ったし、廊下よりもっと豊かな寸法があれば、廊下に花がある、あるいは廊下にローチェストがあって絵が飾ってある家、そういう世界が生れるのではないですか。

大学院出て最初に勤めたころでした。『建築資料集成』を製図板のところに置いていたら「君に望んでいるのは、今までにない考え方で設計してもらいたいということだから、捨てなさい」と言われました。それはカルチャーショックでした。今まで学校で

習ってきたことと、180度違う発想でものをつくりなさいと言われました。学校以上の経験だなと思いました。

山崎 『資料集成』とかそういうものではないものを設計者が考えられる、想像できるとか、思い描けるというのはとても大事ですね。そういうものと、その世界に踏み込んでいった時に、高木さんが言われたような、例えば廊下をギリギリの寸法でやるのではなく、もう少しゆったりしたものをやったほうがいいのではないかと思えるというのは、ある種の建築家の持っている倫理感ですね。倫理感と寸法がちゃんと自分の体を通して一致できているかどうかということは、とても大事なことだと思います。

そういうのって一体どのようにしたら身に付けられるのか、あるいは教えられるのかということは、難しいことの一つです。もしかしたら工学院大学の持っている建築への伝統の一つかもしれないですね。ありがとうございました。すごく楽しい話でした。

高木 本日は貴重なお話をたくさん聞けてよかったです。まとめるのは、たぶん大変ですね。(笑)

コーヒーを、先生が来る前に入れたのですが、ごめんなさい、話に集中しすぎて煮詰まっちゃいました。(笑)

本日はお忙しいところ、大変ありがとうございました。

山崎 こちらこそありがとうございました。

工学院大学建築系同窓会は様々な資格講座を 特別割引でご案内させていただいています。

総合資格学院

提携講座一覧

※価格は税込み

1級建築士ストレート合格必勝コース	●通常学費1,705,000円→	特典学費 1,320,000円
1級建築士学科合格必勝コース		特典学費 990,000円
2級建築士ストレート合格必勝コース	●通常学費1,166,000円→	特典学費 968,000円
2級建築士学科合格必勝コース		特典学費 616,000円

1級建築士ストレート合格必勝コース 2級建築士ストレート合格必勝コース

講師による直接指導と充実のカリキュラムで、圧倒的な合格率!

エントリー講座(オンデマンド)

学科講義前に、試験で出題される基礎知識を習得し学習の基礎体力を養成します。イラスト・図解が豊富なテキストをベースに、映像講義と組み合わせて効率の良い学習ができます。事前に基礎知識を習得することで、今後の学習効果を飛躍的に高めます。

学科指導(対面講義)

「合格サイクル+継続学習」の継続こそ合格への一番の近道!

週ごとに設定された学習項目を、対面講義で講習日の当日中に完全に理解し、アウトプットトレーニングを繰り返すことでその週のうちに確実に得点力に結びつけます。

建築施工実務講座(オンデマンド)

躯体工事を中心に建設現場の様子を収録し、現場経験の少ない受験生でも現場の状況を視覚的にイメージすることができます。視覚的なイメージができることによって、工事全体の流れや各部工事における施工手順、専門用語などが理解しやすくなり、スムーズに学習が進みます。

設計製図指導(対面講義)

当学院が実践する“考える力”の養成指導

試験内容の見直しで出題傾向が大きく変わった設計製図試験。合格に必要なのは、正しい建築の知識をふまえた上で、受験生それぞれの独自の考えに基づいたオリジナルのプランニングを行い、自らの言葉で記述をまとめ上げる力です。当学院では受講生一人ひとりのオリジナリティを重視した指導を行い、“独自の考え”を図面と記述にまとめ上げる力を養成します。

株式会社総合資格 新宿校 TEL.03-3340-5671 担当:福岡
メール:fukuoka-chiaki@shikaku.co.jp



総合資格HP

日建学院

提携講座一覧

※価格は税込み

1級建築士学科本科(通学)	●通常学費770,000円→	特典学費 695,200円
2級建築士学科本科(通学)	●通常学費473,000円→	特典学費 381,700円
1級建築士学科理論(web)	●通常学費330,000円→	特典学費 165,000円
2級建築士学科理論(web)	●通常学費330,000円→	特典学費 156,200円
1級建築施工管理技士一次(通学)	●通常学費308,000円→	特典学費 256,300円
1級土木施工管理技士一次(通学)	●通常学費308,000円→	特典学費 256,300円
2級土木施工管理技士一次・二次(通学)	●通常学費308,000円→	特典学費 238,700円
宅地建物取引士重点(web)	●通常学費110,000円→	特典学費 88,000円
BIM入門講座(web)	●通常学費11,000円→	特典学費 6,600円

1級建築士学科本科

基礎から直前対策まで効率よく学ぶ学科のスタンダードプラン
受験年度の前年11月からスタートし、基礎～試験全範囲を効率よく学んでいくスタンダードコース。通学を基本に試験直前まで多様な学習プログラムで合格力を身につけます。

1級建築施工管理技士一次

3段階ステップ学習で基礎から万全の試験対策を!

試験に直結するポイントを基礎からしっかり学ぶコースです。広い出題範囲の中から重要項目を絞り4ヶ月で効率よく学習することで、確実に一次検定の合格力を磨きます。

2級建築士学科本科

「合格」を追求したトータル学習のベストシステム
建築知識の基礎から受験対策までしっかり学習するスタンダードコースです。

1級土木施工管理技士一次(通学)

基礎から徹底マスター、教材も充実の万全対策
一次試験の出題傾向、重要ポイントを学習し、合格力を養成します。万全の体制で試験に臨むことができます。

詳しい講座内容は
右記二次元コードよりご確認ください。



[受付窓口] 日建学院新宿校 TEL.03-6894-5800 担当:細勢

お問い合わせ・お申し込みは必ず右記専用の二次元コードからお願いします。

専用コードからの受付以外は特別割引の適用は一切お受けできませんのでご注意ください。



お申し込み専用

1級建築士試験対策

令和8年度 試験対策

ストレート合格必勝コース(学科指導+設計製図指導) 学科合格必勝コース(学科指導)

受験前年からの対策で1級建築士をめざす ベーシックコース

受験前年から順次開講～

受験年7月

8月

10月

各科目の重要事項の基礎学習から学科試験レベルの問題にも十分に対応できるようになるカリキュラム。

学科試験

個々のレベルに合わせた巡回指導で試験攻略に有効なテクニックを伝授!

設計製図試験



対面講義 で学力養成

*対面講義は教室によっては通学検校での講義となる場合がありますので、必ず最寄校までご確認ください。

学科指導 合格サイクル + 継続学習の継続こそ合格への一番の近道!

「合格サイクル + 継続学習」とは、1級建築士学科試験を確実に攻略するための学習システムです。各週ごとに設定された学習項目を、対面講義で講習日の当日中に完全に理解し、さらに徹底したアウトプットトレーニングを繰り返すことで、その週のうちに確実に得点力に結びつけます。計画的なカリキュラムに基づいて構成された、この一週間単位の学習サイクルを、本試験日まで継続的に行うことにより、どなたでも無理なく合格レベルの実力養成が可能です。新傾向問題、応用問題、周辺関連事項など、様々な難問にも対応した、確実に合格をめざすための学習システムです。

得点力強化対策

早期診断テスト

学科合格必勝コースの中間期に行われる、過去問を中心とした問題構成の試験。これにより過去問の取り組み状況を確認し、中間地点での弱点項目を把握します。後半戦に向けての学習の目安を立てます。

仕上げテスト

学科合格必勝コースの後期に行われる試験。最終段階での弱点部分を確認し、克服することにより、確実に得点できる問題の取りこぼしを防ぎます。また難度の高い問題に取り組み、解法を学ぶことにより、最終時期の得点力アップをはかります。

設計製図指導 当学院が実践する “考える力”の養成指導

試験内容の見直し以降、出題傾向が大きく変わった設計製図試験。解答例や記述例の丸暗記では、到底太刀打ちできないものとなっています。合格に必要なのは、正しい建築の知識をふまえた上で、個々の受験生それぞれの独自の考えに基づいたオリジナルのプランニングを行い、さらに自らの言葉で記述をまとめ上げる力。当学院では受講生一人ひとりのオリジナリティを重視した指導を行い、画一的な解答にならないよう、“独自の考え”を、図面と記述にまとめ上げる力を養成します。



総合資格学院の5つの指導ポイント

- 指導ポイント1 建築に対する正しい知識**
「必要性が増大した周辺知識」の習得
- 指導ポイント2 建築的判断力**
「多くの構成の中から選択が求められる出題」への対応
- 指導ポイント3 空間構成力**
「実物の建築を設計する力(リアリティ)」の習得
- 指導ポイント4 プレゼンテーション力**
「提案」や「配慮」を確実に伝達する力を養成
- 指導ポイント5 記述力**
具体的かつ説得力のある記述力を養成

1級建築士 学科+設計製図指導

ストレート合格必勝コース

通常受講料 1,550,000円(税込 1,705,000円)のところ

セット割引特別受講料 **1,200,000円(税込 1,320,000円)**

1級建築士学科合格必勝コース

受講料 **900,000円(税込 990,000円)**

2級建築士試験対策

令和8年度 試験対策

ストレート合格必勝コース(学科指導+設計製図指導) 学科合格必勝コース(学科指導)

基礎から学ぶ試験対策で2級建築士をめざす ベーシックコース

受験前年から順次開講～

受験年7月

8月

9月

各科目の重要事項の基礎学習から学科試験レベルの問題にも十分に対応できるようになるカリキュラム。

学科試験

個々のレベルに合わせた巡回指導で試験攻略に有効なテクニックを伝授!

設計製図試験

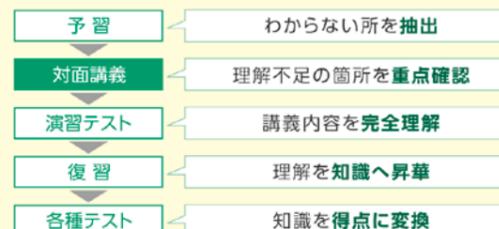


対面講義 で学力養成

*対面講義は教室によっては通学検校での講義となる場合がありますので、必ず最寄校までご確認ください。

学科指導 合格サイクル + 継続学習の継続こそ合格への一番の近道!

「合格サイクル + 継続学習」とは、2級建築士学科試験を確実に攻略するための学習システムです。各週ごとに設定された学習項目を、対面講義で講習日の当日中に完全に理解し、さらに徹底したアウトプットトレーニングを繰り返すことで、その週のうちに確実に得点力に結びつけます。計画的なカリキュラムに基づいて構成された、この一週間単位の学習サイクルを、本試験日まで継続的に行うことにより、どなたでも無理なく合格レベルの実力養成が可能です。新傾向問題、応用問題、周辺関連事項など、様々な難問にも対応した、確実に合格をめざすための学習システムです。



設計製図指導 きめ細かい個別対応で弱点克服、 合格レベルまで着実に実力UP!

当学院の設計製図コースは、合格レベルの実力を養成するために、大きく5つの段階に分けられています。この5段階を着実にステップアップしていけるよう、毎回の講義ごとに「学習目標」を設定。講義の冒頭で目標をしっかりと確認し、それをクリアしていくことで、ステップを確実に上がっていきます。



製図合格への5ステップ

設計製図試験を突破するために求められること、それは①必要な知識をもとに②要求を満たした設計図書を③試験時間内に④独力で⑤印象度をあげ「ランクI」の図書を描くことです。当学院では各段階ごとのテーマに沿った指導で、着実に合格レベルの図面を描く力を養成します。



2級建築士 学科+設計製図指導

ストレート合格必勝コース

通常受講料 1,060,000円(税込 1,166,000円)のところ

セット割引特別受講料 **880,000円(税込 968,000円)**

2級建築士学科合格必勝コース

受講料 **560,000円(税込 616,000円)**

※詳細・ご不明な点等は、下記までお問い合わせください。

※詳細・ご不明な点等は、下記までお問い合わせください。



目の前に信頼できる講師がいるから
一人の勉強時間も、独りじゃない。

田中道子さん
令和4年度一級建築士合格
総合資格のおかげで人生変わりました。
総合資格学院イメージキャラクター
令和4年度一級建築士試験合格
当学院受講生・卒業生
田中道子さん

全国・工学院大学卒業生 1級建築士合格実績 No.1

令和6年度
1級建築士 学科・設計製図試験

全国
ストレート合格者占有率



全国ストレート合格者1,036名中 / 当学院当年度受講生666名

令和6年度
1級建築士 設計製図試験

全国
合格者占有率



全国合格者3,010名中 / 当学院当年度受講生1,768名

工学院大学卒業生
当学院合格者占有率



工学院大学卒業合格者61名中 / 当学院当年度受講生35名

※当学院のNo.1に関する表示は、公正取引委員会No.1表示に関する実態調査報告書に基づき掲載しております。 ※総合資格学院の合格実績には、模擬試験のみの受験生、教材購入者、無料の役職提供者、過去受講生は一切含まれておりません。 ※全国ストレート合格者数・全国合格者数・卒業生学校別合格者数は、(公財)建築技術教育普及センター発表に基づきます。 ※学科・製図ストレート合格者は、令和6年度1級建築士学科試験に合格し、令和6年度1級建築士設計製図試験にストレートで合格した方です。 ※卒業生学校別実績について総合資格学院の合格者数には、12級建築士(専)受験資格として申し込まれた方も含まれており、可能性が異なります。(令和7年1月15日現在)

総合資格学院 **新宿校** TEL.03-3340-5671
〒163-0557 東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル3F

スクールサイト www.shikaku.co.jp **総合資格**
コーポレートサイト www.sogoshikaku.co.jp X → @shikaku_sogo LINE → 総合資格学院
Instagram → sogoshikaku_official で検索!

建築士定期講習

の受講は3年に一度。
なんだか忘れちゃいそう...
そんな方もご安心。

総合資格学院

建築士事務所
に所属する建築士の人は、

必ず受講

しないといけない講習ですよ~。
全国各地に受講場所がある総合資格でぜひ!



総合資格なら受講年の管理をして
くれる。しかも... **無料!**

やっぱり

総合資格

でしょ?



管理建築士 は、建築士事務所に
必ず一人は必要。

それってつまり... 建築士として独立&
起業するなら管理建築士講習は

必須の資格
ってこと!?

建築士にさらに「管理」がつく。
...なんてカッコいいんだ!



講習受講料 (テキスト代・修正交付手数料含む)	一級建築士定期講習 12,000円(税込)	二級建築士定期講習・木造建築士定期講習 10,000円(税込)	管理建築士講習 令和7年3月31日まで 17,500円(税込) 令和7年4月1日以降 17,600円(税込)
----------------------------	---------------------------------	---	--

日程・会場の確認はWebで!
 法定講習サイト
<http://hotei.shikaku.co.jp>

総合資格学院
国土交通大臣登録講習機関
一級建築士定期講習/二級建築士定期講習/木造建築士定期講習/管理建築士講習
Tel 03-3340-3081 Email kanri@shikaku.co.jp
お問い合わせ[平日10:00~18:00 但し11:30~13:00を除く]

ヘリテージマネージャーの 役割を果たすための ネットワーク構築の重要性

工学院大学総合研究所教授 後藤 治

白浜復興住宅 (工学院大学HPより抜粋)

白浜復興住宅は、2011年に石巻市に建築した復興住宅です。この住宅を軸にした取り組みが、2024年1月、「住まいのまちなみコンクール」で最上賞にあたる国土交通大臣賞を受賞しました。東日本大震災で甚大な被害を受けた、宮城県石巻市北上町白浜地区。一時的な仮設住宅ではなく「恒久的に住むことが出来る復興住宅」が本来であるとして、建築学部 後藤治教授(2011年当時)の主導のもとプロジェクト(K-engine Project)を立ち上げ、白浜地区海拔50メートルの高台に民間事業による復興住宅の建設が進められました。復興住宅がめざしたのは、津波により失われた地域のコミュニティの回復と、東北地方の美しい景観をもつ「村」の再生。災害公営住宅のモデルケースにもなるべく、地場の工務店との連携を進め、スピーディかつ安価に住宅を建設できるスキームを基本としました。在来工法木造の復興住宅は、全11棟。10棟は、平屋3棟・2階建て7棟の個人住宅として、1棟は移転により失われがちなコミュニティの場などの共同利用棟として使用されてきました。

白浜復興住宅

ヘリテージマネージャー

現在、各都道府県の建築士会を中心に、歴史的建築物の保存修復に関わる専門家を育成する講習会の取り組みが行われている。2024年度末現在で、山梨県を除く46都道府県建築士会で実施されており、山梨県もその開始が近いと聞く。その受講者は、全国で既に4000名を超えている。

取り組みは、2001年に兵庫県で開始された。その契機は阪神淡路大震災であった。阪神淡路大震災では、多くの歴史的建築物に被害が発生し、行政はもちろん、日本建築学会、兵庫県建築士会等の関係者がその復旧に尽力したが、その相当数が失われた。関係者の努力にもかかわらず、そうした結果となったのは、価値のある歴史的建築物の所在地のリストが整っていなかったこと、復旧に向けて活動ができる関係者が少なかったことがあった。そのため、そうした課題を解消するために、兵庫県建築士会が兵庫県教育委員会と共同で、講習会を開始したのである。

兵庫県に続き、徳島県、静岡県、神奈川県等と同じ取り組みが開始された。そこで、日本建築士会連合会では、そのためのガイドラインを策定することとなった。ガイドラインでは、講習を講義と演習あわせて60時間として、詳細は地方の独自性を尊重しつつも、講習の骨子となるテキストが作成された。

そして、2011年には、全国各地の講習修了者をつなぐための運営協議会が発足した。筆者は、運営委員長に就任し、今日までその役職を務めている。講習を受講した専門家は、各地各様の呼称があったが、全国で集まる場合の呼称としては、最初に講習を開始した兵庫県の敬意を払って、兵庫県で使用されている呼称の「ヘリテージマネージャー」(以下HMと略す)を使うことになった。

ネットワークの重要性

阪神淡路大震災の復旧支援活動を契機に、講習が始まったことからわかるように、HMは講習を受講すれば終わりではなく、その後に相互に協力することが重要である。また、歴史的建築物の修復は、専門家の独断や個性よりも、多くの人々の共通理解を得ることを重視すべきである。このため、日本建築士会連合会では、

講習修了後にHM同士のネットワークを構築することを推奨しており、運営協議会も全国HMネットワーク運営協議会と名付けている。

その役割が最も発揮されたのは、2016年4月に発生した熊本地震の後の復旧支援活動である。そこでは、九州各地建築士会が連携し、そのHMが共同で復旧支援活動にあっている。被災地熊本のみでは、数が不足するだけでなく、被災地では生活再建が第一の課題になり、歴史的建築物の復旧まで手が及ばないので、近隣各地からの支援が大きな役割を果たすのである。



熊本地震後のHMによる復旧支援活動の様子

スキルアップ研修

復旧支援の活動のためには、実際の設計監理や施工をHMが行う必要がある。そうした実

務を行う上では、60時間の講習だけでは、どうしても足りない部分が出てくる。

また、近年は、古民家を宿泊施設に転用することが増えるなど、歴史的建築物の活用を促進する需要が増している。そのため、国は文化財保護法の一部を改正したり、市町村が建築基準法を適用除外するためのガイドラインを整備したりしている。

日本建築士会連合会では、それらの内容を加味して、HMがスキルアップするための標準カリキュラム(講義と演習で合計40時間)を2018年に定めた。スキルアップのための研修も、現在は全国各地で取り組みが行われている。こちらは、最初の60時間の講習とは異なり、まとめて行う形では無く、順次受講する形で実施されている。

おわりに

全国各地のHM養成において、工学院大学の校友は、その中心的な役割を各地で果たしている。筆者も運営委員長として、各地の講習会に講師として登壇しているが、そのときに活躍する校友にお目にかかることがしばしばある。これまでの活動に敬意を表すとともに、その益々の活躍に期待したい。



甲州民家情報館(現もしもしの家)
山梨県甲州市

伝統的建造物群保存地区において、歴史的な家屋の改修モデルとするために、地元のNPO法人山梨家並保存会に協力して工学院大学後藤研究室が設計監理を行なった古民家。現在は、宿泊施設として活用されている。



後藤 治 (ごとう・おさむ)

1988年東京大学大学院博士課程中退。文化庁文部技官、文化財調査官を経て、工学院大学に赴任。現在工学院大学総合研究所教授。博士(工学)、一級建築士。著書に『論より実践 建築修復学』『建築学の基礎6 日本建築史』等。2023年文化庁長官表彰。

山形

最上川沿いにある 三つの風景



山形県は、工学院大学と縁の深い地域である。卒業生や教員が関わったプロジェクトが多数存在するが、ここでは山形の文化を育んだ最上川沿いにある三つの例を紹介する。

最初のきっかけとなったのは、伊藤ていじ(1922-2010,建築史家,工学院大学名誉教授)と山形の建築家・本間利雄(1931-2018)との出会いであろう。伊藤は東京大学にて関野克らとともに各地の民家調査を進め、『日本民家史の研究』で日本建築学会賞を受賞、さらに建築写真家二川幸夫との共著『日本の民家』の「高山・白川」「山陽路」で1959年に毎日出版文化賞を受賞している。民家研究のパイオニアであった伊藤は、1971年から工学院大学で教鞭をとり、研究室の活動としても民家調査を継続的におこなった。

一方、本間はエコロジカルプランニングによる山形米沢八幡原工業団地の新規土地利用調査について取り上げた「建築文化」特集号の編集会議で、地域開発の新たな手法に感銘を受けた。編集会議に参加していた伊藤とも出会うことになる。伊藤の助言もあり自社へ地域環境計画研究室を立ち上げた。

その後、伊藤と本間は共に山形の蔵座敷調査をおこなう中で、柏倉家と深く係りあった。山形盆地西部の中山町に位置し、最上川舟運で代表される紅花等の栽培により富を築いた豪農屋敷で、伊藤ら調査チームによってその価値の高さが確認され県指定を経て現在は重要文化財「旧柏倉家住宅」になっている。本間利雄が主催した本間利雄設計事務所の現代表の本間弘は伊藤研出身であるほか、現在でも伊藤門下の建築人を山形県内で見かける。

最上川舟運の終着地・山形県長井市は、江戸期から近世に至るまで交易で栄え、往時の面影を現在に伝える街並みが残っており、2018年に「最上川流域における長井の町風景観」が重要文化的景観に選定された。長井市出身の二宮正一は、工学院大学(山下司研究室)卒業後、東京藝大大学院を修了、吉村順三設計事務所を経て独立。長井市にて設計活動と並行して数多くの歴史的建築の保存修復に携わった。代表作の「やませ蔵美術館(1991)」は、江戸時代から続く細間屋「山清」の屋敷にある五つの蔵を美術館として改修したものであり、東北建築賞(1993)を受賞するなど建築として評価が高く、重要文化的景観に含まれている。また、JR東日本の「デザインキャンペーン(2014)」のロケ地となり、吉永小百合が登場するCMを記憶している人も多いだろう。

山形県北東部に位置する新庄市には、最上川が大きく蛇行する本合海という名勝があり、そこは舟運の主要な河岸であった。近代以降、山形県では養蚕業が発展し、1934年に蚕業試験場福島支場新庄出張所が開設された。この施設は養蚕の発展を支えながら、2000年まで稼働した。跡地利用として検討がなされた後、施設をそのまま利用する「エコロジーガーデン」構想が計画され、2002年には「原蚕の杜」として開園する。2014年からは施設の充実を図るため、工学院大学建築学部の後藤研究室、富永研究室、篠沢研究室らによって、調査と改修の提案がなされた。そして2021年までに3棟の工事が終了し、その様子は『新建築』等で紹介された。「原蚕の杜」は登録有形文化財であり、歴史的な価値を維持しながら、さまざまな利用に応じることのできる施設として注目を集めている。

最上川の舟運を背景に、特徴ある文化を育んだ山形県での、工学院大学関係者の活躍は今後も見逃せない。



エコロジカルプランニングとの出会い

1974年(昭和49)地下鉄御成門駅そばにある建築設計事務所の一室で、建築文化・特集号「エコロジカルプランニング地域生態計画の方法と実践」の編集会議が行われていた。本間利雄(山形の建築家1931-2018)は日本建築家協会の会合出席のたび、この会議に赴き関心をもって聴講していた。なぜならば、取り上げられ

ていたのが故郷山形の米沢八幡原の新規土地利用に関する環境調査だったからである。

通産省立地公害局と工業再配置産炭地域振興整備公団が、田中角栄の列島改造に伴う内陸型工業団地(山形県米沢市八幡原)立地のための環境影響調査を、エコロジカルプランニングの第一人者であるペンシルヴェニア大学大学院のイアン・マクハーグ教授に委嘱。これを受けて門下・磯辺行久が帰国しRPT(リジオナ

ルプランニングチーム)で調査を行っていた。

1970年代、わが国が高度経済成長に向かって突き進んでいたころ、山形県小国町の自然豊かな厳しい環境で育った本間は、40代半ばになり建築家として周辺環境のことを考えない建築単体の設計に行き詰まりを感じていた。その折に、このように広域的で生態学的(学問的)に環境をとらえた調査に新鮮で強烈な感動を覚えた。

1974年(昭和49)6月30日、本間はその会議の中で伊藤ていじ(1922-2010、建築史家、工学院大学名誉教授)とも出会うことになる。

1975年(昭和50)伊藤、磯辺両氏の「山形のことは山形に住む人が一番よく理解しなければならない」との助言で地域環境計画研究室を設計事務所に併設することとなった。

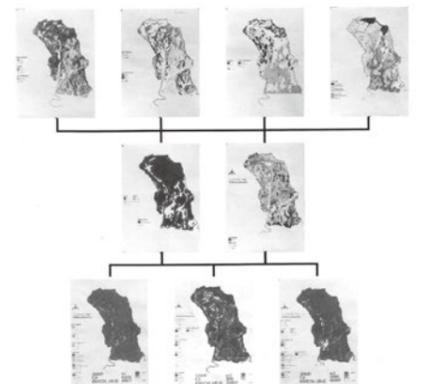
地域環境計画研究室としての取り組み

地域環境計画研究室での最初の仕事は、1976年(昭和51)に取り組んだ「寒河江川流域・葉山南麓地域生態計画基礎調査」である。東京のデベロッパーが寒河江市葉山一帯を20年間貸してほしいとの要望で、市ではその対応に苦慮していた。開発内容は、スキー場・ゴルフ場・キャンプ場・リゾート村などを開発する計画であった。標高1462mの葉山は出羽三山の東端に位置し、文字通り「端山」として山岳信仰、修験の道として利用されていた。

葉山の地形・土壌・植生・水理・土地利用・気象など広範囲な各要因を重ね合わせ、新たに構想される土地利用の適否性を検討、環境としての地域力を把握した。当時地質学や植物学などの専門家は学問の範疇だけの研究が主で、それらのデータを重ね合わせて環境を捉える手法はなかった。そこでマクハーグ教授の手法であるエコロジカル・マップを重ね合わせた図版は、一般の人にも分かり易く地域の環境の質を示してくれた。

また、農村生活・歴史文化などでは山形大学農業経済学の大川健嗣、武蔵大学人文学加倉井昭夫の協力を得て日本の地域社会(農村)に特筆される社会的条件(農業・過疎・伝統芸能・歴史他)なども反映した社会生態系の調査・分析を加えて示した。

調査結果、葉山は非常に弱い山で、開発には賛成でも反対でもないが、様々な問題があると指摘した。バラ色のリゾート開発がより環境へのリスクが少ない構想へ替わり、その報告に対して議会でもめることとなった。その後、数度の会議が開催される中で、伊藤も出席し、飛騨高山の日下部家・吉島家、両家が経済的に苦しく売りに出そうという時から現在の高山をつくりあげるまでの話で、ようやく議会の納得を得る



エコロジカルマップ重ね合わせによるレクリエーション系土地利用の適否 ©本間利雄設計事務所

山形のかたち
風景に気がつくとき

本間 弘
照井 洋悦

旧倉家住宅

ことができた。人間の生存や地域の存続のために生態系への理解が必要なことや、地域の歴史・文化など社会生態の重要さが、議員にも認識され調査報告書がまとめられた。

約50年経った今でも、遠くに聳える綺麗で勇壮な葉山のすがたを見ると開発されなくてよかったとつくづく感じる。

山形県全体を対象とした蔵座敷調査

1974年(昭和49)9月、本間は伊藤を白布温泉西屋旅館(米沢市)、上杉藩時代の旧武家屋敷群である石垣町・芳泉町(米沢市)、柏倉九左衛門家(中山町)※重要文化財・旧柏倉家住宅、丸十大屋蔵座敷(山形市)等へ案内し、この時から本格的に交流が始まる。

その頃、倉敷の調査していた伊藤の話の中で、山形の蔵座敷が話題にのぼった。1980年(昭和55)当時、山形県に多く残されている蔵座敷は所有者と少数の有識者に評価されているのみで、建築的な調査はほとんどなされていなかった。本間はすぐに県教育委員会へ掛け合い、伊藤と共に県内に現存する蔵座敷の実態を把握すべく「山形県下蔵座敷調査」を実施した。

調査は1981-1982年(昭和56-57)の2ヶ年に渡って行われた。伊藤自ら山形県の米沢市から金山町まで調査に参加した。

総数750棟近い蔵座敷が最上川沿いに建てられていることが分かり、のちに地図にマッピングし視覚的にも確認できた。

このことから、紅花や米の生産を主とする最上川舟運がもたらした交易文化と参勤交代の路として使われていた羽州街道などからもたらされた文化の結節点として、山形の蔵座敷が存在したことが認識された。蔵座敷は全国各地に存在する。しかし他地方の蔵座敷の数は微々たるも

のであり、本地方のように本格的で規模の大きいものが広域的に分布している点、その数の膨大さが特異性を示していた。

1983年(昭和58)には、本間利雄設計事務所が独自に実測調査した図面も加えて調査報告書がまとめられた。

調査の一環で、中山町の柏倉九左衛門家が話題に上ることがあり、伊藤は本間と共に何度も柏倉家を訪れることとなった。山形県指定有形文化財登録の足掛かりをつくることになる

柏倉九左衛門家の実測調査

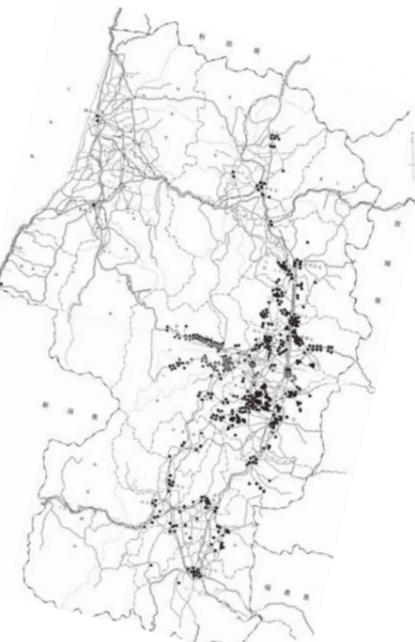
柏倉九左衛門家は、山形盆地を一望できる最上川中流右岸の段丘上にある。九左衛門家を中心に分家が群居し、地方色豊かな景観を形成している。当家は江戸中期山形藩の支配下のもとで紅花栽培などを手掛け、米・青苧などの農作物の売却で多くの農地を集積した豪農である。

屋敷は南北120m、東西60～70m面積7,624㎡と広大で、背後には三嶋山、前方には田園が広がる。敷地の東中央に長屋門を構え、正面に主屋南方に仏間(蔵づくり)と前蔵が雁行して並び廊下で繋がれている。主屋西方には内蔵が接続し、北方には北蔵が渡り廊下で繋がれ、その西側に大工小屋が建っている。

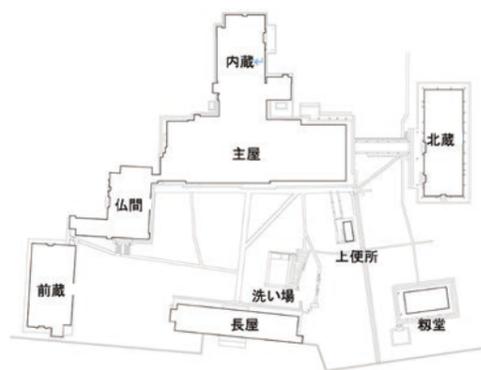
これほどの屋敷が文化財になっていない状態

であったため、そのきっかけとなればと調査をはじめた。本間利雄設計事務所では実測調査等を行い、伊藤が建築の評価をまとめた。調査完了から数年の時間を要したが、柏倉家は県指定文化財となった。

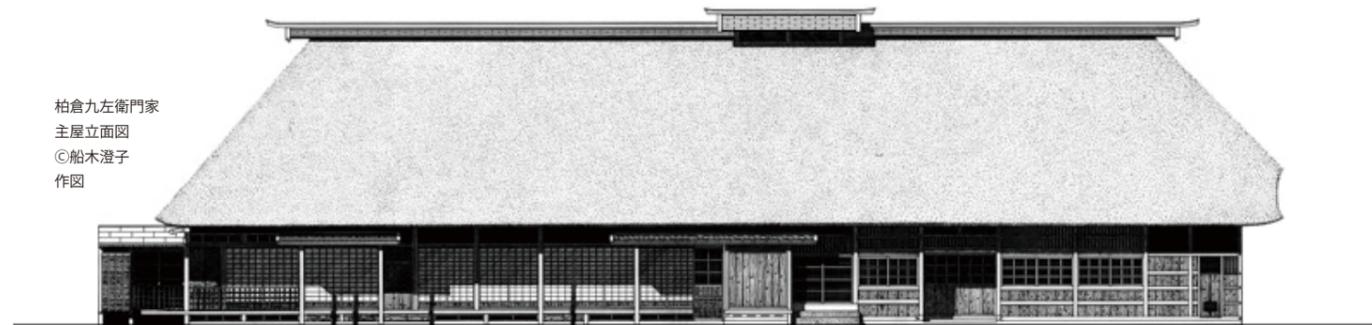
その後山形大学の調査で、令和元年には重要文化財「旧柏倉家住宅」に指定され現在に至っている。なお住宅建築1984年10月号には伊藤が監修した柏倉九左衛門家の特集が掲載されている。



最上川沿いに多く残る蔵座敷
©本間利雄設計事務所



柏倉九左衛門家配置図
©本間利雄設計事務所



柏倉九左衛門家
主屋立面図
©船木澄子
作図

山形のかたち

山 开 多

【地形】 【信仰】 【舟運】

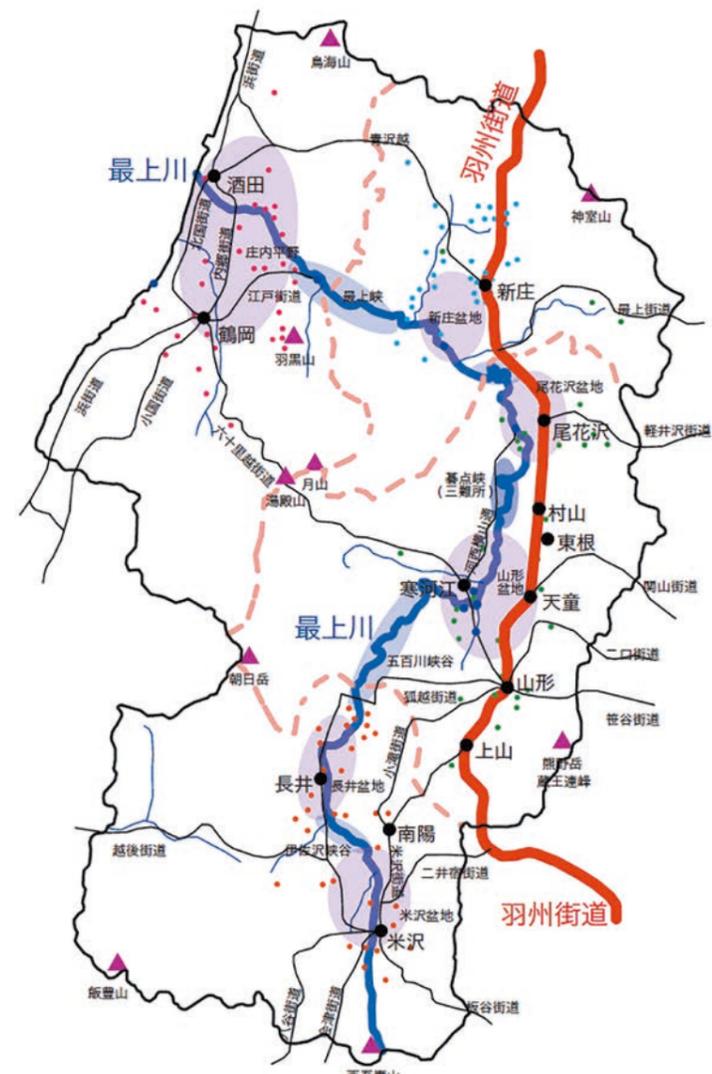
- 山(やま) …【地形】山々に囲まれた地形と豊富な自然による**自然的特性**
- 开(とらい) …【信仰】山岳信仰などにみられる**文化的特性**
- 多(かわ) …【舟運】最上川舟運がもたらした恵みや交通網などにみられる**社会的特性**

これら3つのアプローチから山形の地域性と山形らしいデザインソースを探る。

- 自然的特性**
- 月山・鳥海山・朝日連峰・蔵王連峰・吾妻連峰・飯豊連峰などの山々によって山形県の地形的骨格を形成。
 - 最上川は流域面積が76%に及ぶ。
 - 気候は、日本海岸気候に属し、はっきりとした四季の変化を有する。
 - 季節風が強く、屋敷林の風景をもつ。特に庄内や飯豊町は特徴的な集落環境がみられる。
 - 内陸部は降水量が少なく気温差が大きい盆地性気候。
 - 自然植生は、新緑と紅葉が美しいブナ林を主体。砂丘地は帯状にクロマツ林等の砂丘地植生。
 - 山形県には約180ヶ所あまりの温泉地がある。

- 文化的特性**
- 庄内・最上・村山・置賜の4地域ごとのまとまりが強い。
 - 出羽三山とは、山形県庄内地方に広がる月山・羽黒山・湯殿山の総称。修験道を中心とした山岳信仰の場として、現在も多くの修験者、参拝者を集める。
 - 庄内・最上・村山・置賜それぞれに三十三観音があり、庶民の信仰と観光レクリエーションの場となっていた。
 - 最上川流域の船町・寺津・大江・大石田などの河岸や船着き場が発展し船問屋などの街並みが特徴的な景観を示していた。
 - 山形県のシンボルである最上川・月山・鳥海山などが多く校歌に唄われている。

- 社会的特性**
- 最上川や西回り航路などの舟運や羽州街道などの陸路から、上方や江戸との交易を生み、山形の伝統文化や技術などに多大な影響を受けた。
 - 羽州街道・会津街道・越後街道・六十里越街道・笹谷街道など近世の交通網が現在の国道となっている。
 - 市街地の周囲に水田・畑地・樹園地などの生産緑地があり、その外側に樹林・山並みが広がる三重構造の土地利用。
 - 鶴岡公園・最上公園・霞城公園・松が岬公園など城址が都市の中心的な公園になっている。
 - 山形市の寺町・上山市・米沢市の武家屋敷・大石田町の船着き場跡・最上川沿いに点在する蔵座敷など特徴的な景観を有している。



山形を形づくる「山」「信仰」「川」 青は最上川、赤は羽州街道
やまがたのかたち図版 ©本間利雄設計事務所

本間 弘 (ほんま・ひろし)

1957年 山形県寒河江市生まれ
1984年 工学院大学大学院修士課程修了
現在 本間設計グループ 代表
本間利雄設計事務所 代表取締役
ホンマ・アーキライフ 代表取締役会長
ホンマ・ライフサービス 代表取締役



照井 洋悦 (てるい・ようえつ)

1952年 秋田県横手市生まれ
1975年 工学院大学建築学科卒業
現在 本間利雄設計事務所
地域環境計画研究室室長





やませ蔵美術館

最上川舟運豪商の蔵と屋敷を再生する

三宮正二

1980年代は、戦後の復興も一段落したが、大都市圏への集中などから「地方の時代」が提唱された最初の時代でもあった。日本の文化や地方の見直しが始まった時代である。最上川舟運豪商の屋号山清(やませい)9代目当主の竹田義一郎氏は、すでに家業を離れ、広大な屋敷と点在する蔵をどのように継承していくかを模索した。点在する蔵の中には代々の当主が

収集した美術品や生業であった紬問屋の資料、生活物品が収蔵されていた。その蔵を美術館に改修し、居住域を除いた屋敷を開放することで蔵と屋敷の継承を計り、地域活性化へ寄与する計画をたてた。計画の実施に、リターンし、蔵の調査を始めた私が関わることとなった。

「私たちは時空間を超越できない。」

時空間とは生まれた時代(時間)と場所(空間)のことである。私は戦後の団塊世代として山形県南部(藩政時代は米沢藩)の自然豊かな地方都市に生まれ育った。吉村順三先生はよく「人間(建築家)の空間感性は幼少期の体験に大きく左右される。」と話された。幼少期、どんな家屋や街に住み、或いは山や川、野原で遊んだのか、その空間体験は一生離れることはないということであろう。

東京へ出て建築を学び始めた1970年代前後、今振り返れば戦後わずか25年程の時代にあつて、工学院大建築学科の教授陣と学生が一体となって醸し出すあの熱気の授業の数々を思い出す。建築デザイン、歴史、構造、設備、都市計画など、往時の最先端の学識を最高の布陣の先生方から学ぶことができた。但し、幼少期は自然の山河で遊び、降雨や積雪時は茅屋根の民家の土間で遊び育った身である。山下司先生のFLライト論や武藤章先生のA.アールト論に傾倒していったのは当然の成り行きだったように思う。また伊藤ていじ先生の民家や蔵、城郭など日本デザイン論も印象深い。

日本全体が戦後の復興へ現代建築技術の粋を追い求めていた時代である。あらゆる分野で開発と保存、変革と伝統が闊ぎあつていたといえよう。その時代にあつて、今振り返っても工学院大の建築教育は一方に偏ることなく、伝統的な日本建築の在り方、新しい現代建築も幅広く教えていたように思う。明治の創設時の伝統を受け継いだ、公私立隔てのない老壮交えた教授陣による教育方針、そして築地から淀橋(新宿)へと何より東京一交通の要衝地での活気が大学の全てを物語る。

但し、復興が優先された時代である。建築デザイン分野では、よく対比された有機主義的建築(オーガニックアーキテクチャ)と機能主義建築(ファンクショナルアーキテクチャ)論争では、有機主義的建築は難解だからと敬遠されていった。

「時代を語る視点は刻々と変化する。」

時代によって創られた建築への視点も同様である。

有機主義的建築の巨匠FLライトが帝国ホテルと共に日本で設計した自由学園の目白校舎

(明日館)は大正10年(1921)着工、翌年講堂、食堂、西教室棟が完成した。「婦人の友」大正11年6月号には完成した明日館の写真とライトの趣旨が掲載されている。「その名の自由学園にふさわしき自由なる心こそ、此の小さき校舎の意匠の基調であります。・・・生徒はいかにも校舎に咲いた花にも見えます。木も花も本来一つ。そのように、校舎も生徒もまた一つに。」

この文面からもライトの有機主義的設計思想を読み取れるが、往時ライトは帝国ホテルの工事の遅延や工事費の増大等で設計監督を罷免され、翌月(大正11年7月22日)失意のうちに離日している。明日館はライトの言葉どおりに敷地内の自然、校舎、教育が一体となった運営が続いていたが、築50年後のパブルの前哨期ともいえる1970年代半ば、地価は高騰、老朽化が激しく解体も止む無しの声も聞かれた。自由学園では日本建築学会に「復元可能な図面資料」作成を委託、学会では歴史・意匠委員会の下に「自由学園明日館実測小委員会」を設置、ライト研究に関わりある大学教授や学生が招集、1974年実測が始まり、その報告が建築雑誌(1975年10月号)に掲載されている。私はライトに直接学んだ野田太郎先生(当時東京藝大教授・元工学院大教授)の院生として実測に参加、デザインの凝縮する講堂・食堂を担当させてもらい「自由学園の実測」と題し投稿した(新建築1974年11月号)。校舎へのアプローチから講堂、食堂、厨房へスキップフロアーを結ぶ流れるような動線と天井や光を巧みに操る有機的空間構成はライトしか創り出せない。自由学園では老朽化していく明日館の各所を補修しながら使い続けた。すると、実測図の完成から22年後の平成9年(1997)明日館は国の重要文化財に指定された。前年の登録有形文化財制度の発足など歴史的建造物に対する社会の認識が変化した。平成14年(2002)改修工事が完了、21世紀においてもライトの有機主義的建築を誰もが体現できることとなった。

「人は抛(よ)り所なしに生活できない。」

生きていく上でモノ(衣食)と建築(住)は不可欠であり、その歴史の積み重ねの上に現在がある。中でもモノを保管する蔵(倉)は高温多湿の日本において独自の発展を遂げてきた。この日本の深層文化に大きく関わる蔵(倉)を研究することは、意義深い。吉村順三先生の事務所

での修行を経て故郷に戻った私は、米沢藩政時代最上川舟運拠点だった街中を回った。すると、旧街道沿いに多くの蔵が散見できた。幼少時通った道沿いの蔵の景観がまだ残っていたのだ。

早速全域の調査を実施し、蔵に関する資料を集め始めた。同時期、元禄15年(1702)創業の記録の残る「やませ蔵」では、ご当主ご夫妻が敷地内に点在する蔵を美術館にする構想がもち上がっていた。

私が初めて敷地を見せて頂いた時、屋敷内は300年の歴史が混然と凝縮された景観であった。江戸から明治、大正、昭和と屋敷内で営まれた家業と生活の断片が随所に残存する、いわば景観の宝庫である。歴代が建てた蔵や母屋、庭、水路、樹木、畑地が屋敷内に混在する。中でも本来の役目を終えた蔵の周りには古い木材や石

材が積み上げられていた。但し蔵の内部は整然と物品が管理、保管されていた。眠っている貴重な地域の宝である。当主ご夫妻を交えて蔵5棟を展示用として改修し、創蔵(つくりぐら)と新たに命名された管理棟と洗蔵(便所)を新築する、基本案が決定した。屋敷内に眠っている地域の宝をいかに再生させ、新たな景観を創っていくかが最大のテーマとなった。その建築的なデザインの基本は蔵であり、随所にやませ蔵に残存する袖柄や古木、古石を再生利用した。蔵は古来より日本人の暮らしを支えた貴重な建築物である。矩形の単純な骨組みの中に蔵本来の機能である防火や盗難に備えながら、物品を百年単位で保管する。やませ蔵でも元禄年間の大福帳の和紙が真新しいのを確認できた。その調湿は蔵の周囲の厚い土壁と、床下、内部、開口部などのきめ細かな通気による。蔵はただ物品を保管す

るだけの無機質な建築ではない。「用と美」を備えた日本の文化遺産といえる。開口部、基礎、腰壁、軒先、棟などに用(使い勝手)と美(装飾)が見事に凝縮されている。戦後、ライフスタイルの変化から急速に解体が進んだ蔵や民家を、早くから着目研究された当時工学院大教授の伊藤ていじ先生は昭和48年(1973)「日本の倉」を発刊した。半世紀後の今日においても唯一といってよい蔵の全方位を網羅した歴史的著作である。

やませ蔵美術館の建築

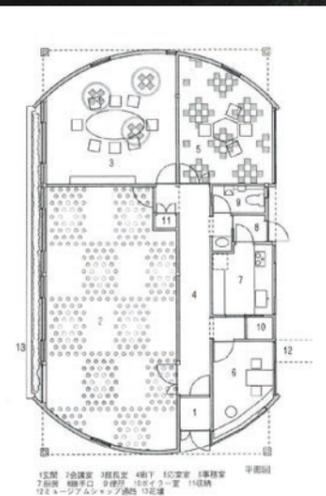
美術館全体の管理棟「創蔵」や2000年に増築された「ミュージアムショップ」も基本構造は蔵である。柱、梁の単純な架構を踏襲し、創蔵のホールでは排煙とサイドライトを兼ねた越屋根を含めた勾配ある大きな空間とし、音楽会、講

談、イベントなど多目的利用に備えた(写真①②)。館長室は水平天井とし越屋根サイドライトの光を障子で受け、天井と面一納まりとした(写真④)。床は、やませ蔵に残存する明治期の袖柄の見本帳からホールでは水玉、館長室では円形模様を部屋に合わせて採用した。山形は伝統的に緞通がさかんな土地柄だが、コスト面から機械織厚さ10mmのウィルトンカーペットとした。空調は床暖房をメインとし、館長室はエアコン、ホールは排煙窓利用の自然通気とした。創蔵、ミュージアムショップとも地元の大工棟梁と共に、金物に頼らない伝統工法を中心に原寸で検討し施工した。梁材は当時多く流通されていた米松を採用した。但し米松はヤニが出る樹種だが用材時より和紙で養生するなど慎重に対応した結果、ヤニや変形することなく30年建っている。創蔵の東西両面は入館者の導入や視線を考

慮し、曲面壁とした。蔵のデザインを基調として、軽快感も求めた。曲面の外装は無塗装天然ヒノキを張った3寸幅の複合フローリングを縦張り防腐着色塗装とした。上部表面外壁はプラスター塗とし点在する屋敷内の蔵と連続する景観を保つように配慮した(写真③)。ミュージアムショップの内部柱は陳列もあり見え隠れとし、小屋架構のみ現わし蔵の美術館らしいショップ空間をめざした。越屋根部では全寸現わしの垂木は勾配天井面で見附を変えリズム感を演出した(写真⑥)。建具についても地元職人によるタモ無垢材を部屋に合わせてデザインした。欄間共天井まで一体の建具としシャープさを出した(写真⑤)。東蔵、南蔵、新蔵、味噌蔵、質蔵のそれぞれに蔵の特徴があり、一部展示を優先し改変した。新蔵と呼ぶが明治期の蔵で、初蔵だったが、床を上げ座の鑑賞に対応し畳敷きとした(写真

⑦)。南蔵は江戸期の古い蔵で、基礎、柱をジャッキアップし改修した関係で大壁の蔵となった。上部架構は、チョウナ加工や長い年月の補修跡が残存している。そこに平成15年地元山形大学で開発の「有機EL照明」は直流で発光し、目や絵画に優しくかつ省エネであり、県内の公共的施設に試験導入された(写真⑧)。

やませ蔵美術館は、平成3年(1991)年開館、域内初の蔵の美術館として地域に大きく貢献したが令和元年(2019)年閉館した。同時期、国の重要文化的景観の重要建築物に指定され、今日も晩秋には紅葉が色づき、江戸期に整備された水路には清流が流れ、最上川の大河に注ぐ。(写真⑨)。



二宮 正一 (にのみや・しょういち)
建築家 一級建築士

1948年山形県長井市生まれ
工学院大学工学部建築学科卒業
東京藝術大学大学院建築専攻修士課程修了
1975年(株)吉村順三設計事務所入社
1981年二宮設計事務所設立 現在に至る
1993年「やませ蔵美術館」で日本建築学会東北建築賞受賞 長井市域を中心に建築設計とまちづくり活動実践 「山清」屋敷以後関わった「丸大扇屋」屋敷は市に寄贈、「長井市文教の杜」として公開中

【活動テーマ】 学生時代に社会問題化した環境問題解決へ向けて、建築分野からの提言実践を行う。

1989年 「米と自然の探遊館」老舗米問屋の社屋移転を機に「生産者の顔の見える米」を販売実践した。当時は県単位販売が原則だが、消費者は無農薬の有機米を望んでいた。
1994年 『自然に近づく社会』発刊 「欧米に近づく」為の戦後50年を経て、今「自然に近づく社会」への移行、実践が始まっている。地域から問う21世紀の自然と人間の共生論。と帯に記した。今日の脱炭素の動きへ連なる。
2020年 『長井市史(平成版)』『建築・都市・環境編』監修執筆。2014年より構想し、地域の建築や都市の構架の経緯、国にも先導する環境施策などを整理。小さな地方都市で可能な市史の綴りだが、応用はできる。笹野観音堂関連では工学院大後藤治先生の協力を得た。



NICHE Gallery

最上川沿いにある
三つの風景

山形

山形新庄の守りたい風景

中村 出

記憶を繋ぐ

私は今、家業の建築会社ヤマムラに所属し、新庄(故郷)と台東区東赤羽の二拠点で古い建物の再生に力を入れて仕事をしています。様々な経緯がありますが、工学院大学に在籍していた頃に後藤治研究室に所属して日本各地の歴史ある建物の調査に関わったことが非常に大きいと感じています。この度、母校工学院大学同窓会誌NICHEに御縁を頂き、私自身の故郷新庄における活動も一つの拠点である東京入谷の活動、それらに対する思いを紹介させていただくこととなりました。

建物再生は

東京入谷の思い出の地

故郷新庄で地域の憩いの場 旧蚕糸試験場

大学時代、各地の歴史と地域性溢れる建物や町並みの調査を経て、「自分自身の故郷の建物にも貢献できないものか?」と考えるようになりました。故郷新庄には昭和初期に国(農林省)が建てた2つの公共施設があります。1つは旧蚕糸試験場新庄支場。もう一つは旧積雪地方農村経済調査所(通称:雪調)。私は幼い頃、自分の母親から「この2つの施設はあなたのひいおじさんが建てたんだよ。」と聞かされていました。旧雪調には棟札が残っており、大工棟梁として曾祖父小林貞一郎の名前が確かに刻まれていました。故郷にある歴史的建造物というだけでなく、自分の

先祖が尽力した建物という文脈を知って、より大切に残していきたいという思いが強くなったのです。

私が工学院大学大学院を卒業した2009年の夏、私は恩師後藤先生にこの旧蚕糸試験場と旧雪調の写真を持って研究室を訪ねて、「これらの建物が登録文化財に値するかどうか見に来て頂くことは出来ませんか」と相談させて頂き、数週間後に新庄に来て頂くこととなりました。その日を契機に、新庄市が工学院大学と協議を重ね、旧蚕糸試験場活用を進めるべく建物調査、価値付、耐震改修というプロセスを経て、現在は産直市場、カフェ、シェアオフィス、イベントスペース等の複合的機能で日常利用され、地域の憩いの

場になっています。

また、この間(2013年)ここに現存する建物10棟が国登録有形文化財となりました。

この場所は建物のみならず、屋外の樹木を含めた広大なランドスケープにも魅力があります。これからも景観と共に生き活きとした活用、運営に対して市民としても関わっていききたいと思っています。

古いものは放っておけば朽ちていきますが、この施設を活用出来たことによって「建物は年数が経ってもリノベーションによって蘇り、思い出と共に人がつながり合う場になり得る」ということが体現されたと実感しています。

後藤先生を中心として工学院大学の先生方、

現場で汗を流して調査してくださった後輩達、この場所を応援し続けて下さった市役所、市民の方々には感謝の気持ちでいっぱいです。これからもこの蚕糸試験場跡だけでなく、大切な新庄の原風景を守り活かす活動を続けたいと思います。

東京入谷の銭湯建築活用から始まった建物再生事業

私が仕事において本格的に「古い建物の再生」を始めたのは2015年頃のこと。

当時の自分自身の居住地東京都台東区にある入谷(正確には下谷、入谷、根岸)というまちから始めました。このまちには、ここ10年くらい親し

くさせて頂いている家主さんやお店の運営をしている方達が暮らしています。現代都市的なマンションも多いですが、戦前から残る古民家、長屋、銭湯、写真館、お煎餅屋さん、肉屋さん、花屋さん、神社、お寺等が残り、どこかほっとする風景がかるうじて残っている不思議なエリアです。私の父の故郷がここ入谷であることから学生時代から住み、10年以上、20代と30代前半の大半はこの界隈で過ごしました。

自分が暮らしていた住まいからほど近い場所に「快哉湯(かいさいゆ)」という銭湯があり、疲れが溜まった時はここに行き、富士山のペンキ絵を見ながらのびのびとした浴槽の湯に浸かって心身を癒しました。高校まで住んでいた新

庄にはこのようなスタイルの銭湯が無く、最初に入った時は衝撃を受けました。大学の研究で歴史ある建物を知れば知るほどこの日常的に入れる快哉湯が好きになり、頻繁に通うようになりました。

そんなことがきっかけで、ビルばかりで古い建物なんて無いと思い込んでいた東京のまちを歩くようになりました。歩いてみると入谷、根岸にも素敵な建物が存在し、さらに東京芸術大学がある上野桜木、谷中のほうに足を延ばすとその味のある古民家を保存活用されている団体(NPO たいとう歴史都市研究会)があることを知りました。この団体を知ると間もなく、自分自身もその団体に入会し、東京における仕事ではなかなか



触れるチャンスが無かった古い建物に関われる可能性が巡ってきてとても嬉しかったことを覚えています。入会して数か月後に、とある銭湯からNPOに御手紙が届いていると私に通知がありました。なんと私が通っていた快哉湯の家主さんからの御手紙だったのです。

長年銭湯を営んできた家主さんも高齢になり、建物や設備も老朽化しているので銭湯は近い将来やめてしまうが、建物には思い入れがあるので保存活用する方法があるかどうか知りたいという相談の御手紙でした。日常的に入りに行っていた銭湯の危機を知ってショックを受けると同時にNPO入会直後にこの話が自分に届いたことに驚きました。NPOメンバーと一緒に建物調査をさせて頂き、間取り、構造、規模感、劣化具合を把握した上で、どう活用していくかという対話が始まりました。

銭湯の運営を続けて頂く前提で、銭湯として使っていない時間帯をイベント等で運用する案、カフェ、Bar、花屋、映画館等、妄想的なものも含めて様々な案が浮かび上がりましたが、どれも現実の話には落ち着かず、再度自分事として考え直しました。

考え抜いた末、浴室側をシェアオフィス、脱衣所側をカフェにするという案に落ち着きました。その理由の一つは、自分自身がこれからの時代を見据え、スクラップアンドビルドではない建物再生の拠点をここ快哉湯に作りたいという大きな構想を抱き始めたこと。もう一つは建物全体がオフィスとなると銭湯のようにふらっと入る場所が失われると思い、まちに近い脱衣所にはカフェを併設させたいと思ったことです。この大きな方針と家主さんから建物をお借りする賃料等の条件の話し合いが決着し、快哉湯はオフィス兼カフェとして保存活用されることとなりました。

ほっとするのは東の間、自分達で活用するために傷んでいる部分の修繕、耐震補強計画、オフィスとカフェとして成立させるための計画、そして施工。計画～施工のプロセスは自分の夢が叶う瞬間でもあって眠れないほどワクワクした日もあり、また古くなっている建物の改修に時間、労力、費用が想像以上にかかり不安を感じる日もありました。

平成の終わり、2019年の4月に建物再生が完了しお披露目会を行いました。自分自身はヘトヘトに疲れていましたが、家主さん御一族はじめ、入谷、台東区で活躍される方達、大学の同級生、先輩後輩達が蘇った快哉湯を見に来て下さ



り感動の日でした。【写真1】

そして、自分達「建物再生室」の拠点として仕事がスタートしました。その時点でカフェの運営形態、借り手は決まっておらず、平時はオフィスと打ち合わせで使い、休日に地域の方から持ち込まれたワークショップ、マルシェ、絵画展、ライブ等を行いました。【写真2】

その約1年後、近隣のホテル運営者(株式会社ベストイト)と知り合い、rebon快哉湯という名のカフェがオープンして今に至ります。【写真3】



建物再生を通じて「人の思い出、まちの記憶を繋ぐ」

東京入谷の快哉湯改修がひと段落したのが2019年。その翌年の2020年、全世界的に新型コロナウイルスが猛威をふるい、その後の紛争等の影響で建築資材の高騰が起きています。国内でも気候変動による災害が多くなっており、常識だと思っていたことに対して多くの人が変化を感じていると思います。

そのような時代の変化の中で、私自身が地道に取り組んできた「建物再生」の活動への思いはより強くなってきました。また、有難いことに地方でも都市でも「実家が空家になってしまったのでどう活用できるか一度見てほしい」「まちで大事にされてきた文化財の改修を相談したい」等、様々なレベルの相談、要望を求められるようになりました。家主さんが大切に思う家を今後も繋いでいくために1軒1軒傷んでいる部分の修繕、耐震補強、断熱性能、設備の更新等をトータル的にまとめていくに連れて自分が今後も取り組んでいきたい役割のようなものが見えてきました。

それは建物再生の仕事を通じて「人の思い出、まちの記憶を繋ぐ」ということです。私達の世代は、親が戦後に生まれ、人口が増え、地方にも都市にも新しい建物が増え、経済成長の時代を子供の頃に過ごしました。その開発に伴い、壊れてしまう建物、お店、路地の中に人がほっとする懐かしさ、故郷のようなものを感じ、なんとも勿体ない、寂しいと思うようになったことが活動の原動力です。

その反面、懐かしさを感じる昭和以前の建物を残し、再生出来た場合に自分自身も家主さんもそこに関わった技術者達も喜びや安堵を感じる体験を経て、その仕事にやりがいを見出しているところです。これまでまちの記憶を一新して新しく大きな建物を建てるのが主流の業界であったかもしれませんが、既に在る建物を活かし、人やまちの思い出を繋ぐ役割を担う建築会社があっても良いのではないかという思いが強くなってきました。これからも、人が大切に使用してきた建物、職人気持ちを込めて作った空間、建具1枚の魅力を見逃すことなく、スタッフと共に建物再生を楽しんでいきたいと思っています。



中村 出 (なかむら・いずる)

1984年生 山形県新庄市出身 高校まで新庄で育つ
 2003年 工学院大学入学
 2005年 後藤治研究室にて歴史的建造物の保存修復を学ぶ
 2009年 工学院大学大学院卒業
 2009年～ 株式会社ヤマムラ(東京・仙台・山形)勤務
 2019年 東京都台東区下谷旧銭湯快哉湯の活用プロジェクト
 2020年～ 新庄(山形)と台東区(東京)の二拠点の建物再生をメインに活動

業績 建築ジャーナル2019年特集
 「建築の保存、活用の未来」に掲載される
 商店建築2021年1月号
 快哉湯再生プロジェクトについて寄稿
 建築士(日本建築士会連合会会報誌)
 2021年4月5月6月号に寄稿

所属 株式会社ヤマムラ 本社：山形県新庄市大字福田711-6
 東京サテライトオフィス：東京都台東区下谷2-17-11 快哉湯



保存と 活かす能力 （歴史的建造物保存活用資格者） ヘリテージ・シマナー・ジャーナルへ

柴睦巳



国登録有形文化財指定を受けた宮崎県庁本館講堂

ヘリテージマネージャーとの出会いまで

1981年(26才)大学院を修了し1年後に地元
の設計事務所に勤めることになり、この時に強く
想い、それまでお世話になった方々へ送った手
紙の中に「故郷に帰る以上は故郷でしかできな
いことをやりたい」と書き込んだ、ただしその時
点でそれがどのようなものかは漠然としていた。
社会人となり事務所で与えられた仕事に取り
組み、縁があり入会した建築士会で志を共有で
きる仲間達との出会いもあり、青年部という比較
的自由な場で様々なことを行うことができ、その
時に始めた「建築セミナー」は現在でも世代を超
えて受け継がれている。

1989年(34才)私にとって「故郷でしかできな
い」と思える出会いがある。それは県北の南郷村
の「百済の里づくり」という地域づくりであり、そ
の後柴設計として独立した後も引き続きソフト・
ハード両面で、歴史的建造物(百済の館・西の正
倉院・鐘樓)や伝統的工法による建物(村民の手
による茅葺屋根の南郷茶屋)に関わることがで
き、その時のことは同窓会誌「NICHE Vol.25」の
(同窓生を訪ねて 宮崎県南郷村「百済の里づく
り」:柴睦巳)で紹介していただいた。

次に1996年(41才)に2度目の「故郷でしか
できない」との出会いがある。それは南郷村での
取り組みがほぼ終了した後に隣接する諸塚村と
の出会いであり、この村は1993年に朝日森林文
化賞を受賞し、当時村内で産出される木材を使
った「諸塚村産直住宅」を模索していた。すで
に他県の設計事務所がプロデュースする委員
会が発足していたが、役場の若い担当者から委
員会への参加と発言を求められた。南郷村で経
験した関係者参加型の取り組みを参考にソフト
面を重視した内容とし、地球環境と森林保全、地
産地消、職人技術の伝承、建築主家族の住まい
づくりへの積極的参加をキーワードとすることを
提案、その後、九州限定での「諸塚村産直住宅」
が各県で展開されることになり、また村内の古民
家再生による宮崎県初のグリーンツーリズムを
ソフト・ハードの両面で取り組むことになった。

この二つの村での取り組みは建築ジャーナル
で「南郷村物語」、「諸塚村讃歌」というそれぞ
れのタイトルで連載の機会をいただき、また建築
士会連合会が2005年に発行した「地域発・三重
奏の響き」の中で(「里山からの物語づくり」の仕
掛け人)というタイトルで、全国でまちづくり
に取り組む30人の1人として紹介された。

ヘリテージマネージャーとの出会い

2013年(58才)に日本建築士会連合会で進
められているヘリテージマネージャー(HM)とい
う存在を知り興味を持った。阪神淡路大震災が
要因でHMの必要性を認識した文化庁も支援し
ており、HMの育成が全国に広がり、宮崎県内
でも100名のHMを目標に育成をスタートするこ
とになった。私自身、建築士会活動は青年部(〜
40才)の時は熱心に取り組む、結果、自身のスキ
ルアップになったが青年部終了後は会費納入だ
けの会員となっていた。HM養成の話聞いた時
に、私のその後の社会貢献の一つに成ると思
い3年間限定でこのHM養成講座実施委員会の
委員長を自ら引き受けた。

当面HMの取組は業務としての可能性は低
く、建築に携わる者の自己満足にしか過ぎない
が、大学時代に山崎研、伊藤研と歴史に関わる
研究室での経験、社会人となり南郷村の百済の
里づくりや諸塚村での古民家再生への取り組み
で、民家や歴史的な建造物に関わり、その時々
の専門家との繋がりもあり、そして当時、全国
のHMのとりまとめが本学の後藤治氏だということ
を考えこれは与えられた使命ではないかと思
えた。

HM養成講習会に取組む

2013年に委員会を発足し1年間の準備を
経て2014年5月に第1期HM養成講座がスタート、
講座は将来のHMの資格認定に配慮したカリ
キュラムが日本建築士会連合会で決められ、内
容は二つに分かれており「講義(39時間)」と「演
習(21時間)」で、オリエンテーションからはじ
まり、HMの基礎知識、技術編(建築修復の技法・
工法)、まちづくり編、登録文化財と指定文化財
の調査と報告書作成、最後に受講生による「私
が見つけた歴史的建造物」の報告と計60時間と
なっている。

多くの県での講習会は地元大学との連携で
進められているが、宮崎県には建築学科のある
大学がないので、全国的に講師を依頼すること
ができ、それぞれの分野で最も知識と経験が豊
富な方を選び直接連絡を取りお願いした。

講師選定は講習会の魅力付けにもなり講座
内容によっては受講生以外の参加者も募ること
にした。特に近現代建築として日南市文化セン
ター(丹下健三)をテーマとして取り上げた時に

は、丁度、新建築社から「丹下健三」が出版さ
れ、その著者である藤森照信氏に講師をお願い
することができ、そのことを建築士会九州ブロ
ック会に告知すると九州全県から200名以上
の参加希望者となった。

通常、宮崎県建築士会の各委員会構成メン
バーは県内各支部からの推薦だが、より充実
した講習会にしたいと熱心な9名をお願いしス
タートするが、2期目以降は講座内容に興味を持
った修了生が「ぜひ委員となり講座を企画し
たい」と希望し3期目には17名と倍近くに増
えた。

「ひむかヘリテージ機構」の設立

2017年2月に3期目が終了し計108名が
受講し全講座を修了した83名のHMが誕生した。
養成講座終了後に修了生の中から希望者を募
り、1年をかけてHMの活動をどのように進め
ていくのか検討し、2018年6月に新たな代表
による新組織「ひむかヘリテージ機構」がスタート
する。

2017年5月に国登録有形文化財指定を受け

た宮崎県庁本館講堂で設立総会を行い、機構
立ち上げまでの経緯について説明し私のまとめ
役としての役割を一旦終え、その後は世話人会
の一人として若い代表をサポートしている。

HM歴史的建造物へ(再生)

私自身立場上、3年間(計180時間)全ての講
義・演習を受講することになり、そして業務で取
組んでいた「百済の郷づくり」や「諸塚村産直住
宅」により、伝統的な木造建築に詳しいという評
価を得て、戦後間もなく建てられた築64年のS邸
のリノベーションの機会をいただくことになる。
70坪以上の平家で先代が建てた建物を高齢の
息子と孫がこれからも大切にしたいという意向
を大切に、将来の国登録有形文化財指定の可
能性を考慮し外観保持を前提に、これからの快
適な生活を考慮したリノベーションとなった。

HMとして歴史的建造物へ(所見作成)

高鍋町内の1862年に建てられた旧武家屋敷

「旧吉田家住宅主屋」を国登録有形文化財に
したいとの所有者(フランス在住の日本人)Tさ
んの想いを受けて所見を作成することになり、
その中で「建物は、幕末から明治、大正、昭和、
平成と時代の推移による家族のあり方や、その
時の所有者の社会的立場、そして家族に対す
る想い等により少しずつ変化している。幕末の
中・下級武家屋敷の形態を骨格として残しつ
つ、時代の変化に対応してきた事例として、日
本の近世から現代までの住宅変遷を確認でき
ることは、建築学上貴重な資料となり遺産でも
ある」と評価し、2018年5月に県内92番目の
国登録有形文化財となった。

次に国登録有形文化財申請のための所見
作成は、都城市内に1926年に建てられた旧江
夏岩吉家住宅である。この建物は棟札に大正
15年5月30日に上棟と記載があり当時の姿を
そのまま残している、所見では「明治以降、日
本家屋の間取りは様々な変化を遂げてきた。伝
統的な和風住宅に洋風の考え方による住まい
方が徐々に取り入れられた。地方の有力者の
住宅ではそれが洋館という姿であったり、それ

までの伝統的な間取りに生活の洋風化という形
で現れてきた。江夏家住宅においても関わった
建築家大久保佐太郎の試みなのか、家族の生
活の変容なのか、その兆候を見ることができる。
玄関和室から三部屋が繋がる「続きの間」があ
りながらも、それぞれの部屋を通らずに各室に
アプローチできる動線、そして居室部分と水回
り部分を明確に分けるゾーニングがそれにあ
たる。また女中室の取り扱いは時代を反映して
いる。明治に入り戦後までの間に日本の住宅は
徐々にだがその形を変えていく、その中でも江
夏家住宅は書院造からスタートした和風住宅
が、そのゾーニングと戦前という時代背景の中
で作られた中流階級の住宅であり、今日までほ
ぼ当時の姿で残されている貴重な建物であり、
所有者が自身の事業である日本の伝統食品の
味噌・醤油の普及活動の場所として取組んで
いることを考慮すると、食材とともに未長く保
存活用されていくことが望ましい。そのために
も国の登録有形文化財として指定されることを
強く望む」とまとめ、2023年5月に県内109番
目の国登録有形文化財となった。



HM熊本地震による歴史的建造物の被害調査へ

2016年4月に熊本県と大分県で発生した「熊本地震」は、九州各県のHMにとっては忘れることのできないものとなった。地震発生前から建築士会九州ブロック会では大地震発生時の相互応援に関する協定が結ばれ、事前にその時のための演習が2か年にわたり大分県日田市と鹿児島市で行われていた。宮崎県のHMは3回それぞれの地域に赴き歴史的建造物の被害状況を調査し、その時に応援主官県となっていた福岡県建築士会に報告した。宮崎県のHMは、5月に球磨地方に8名、7月に八代地方に18名、9月に別府市に4名調査に参加している。

フランスへの誘い

本来業務をボランティアとして行うことはないが、最初に取り組んだ「旧吉田家住宅主屋」は初めての所見作成ということもありあえてその

費用の請求はしなかった。ただし、この取組みには後日素晴らしい出来事が待っていた。

フランス在住のTさんには同居しているジュネーブに勤める息子D氏がおり、彼とは数回高鍋町で会い周辺の私が設計した住宅を案内し、またS邸のリノベーションにも大変興味を持ち、所見作成が終わった頃、2人からフランスの自宅に来て欲しいと誘いを受けた。その住宅は18世紀に建てられた石造の建物で、農家時代に雇用人達が使っていた3層のスペースをリノベーションするために、その基本計画を私にして欲しいという依頼で、期間は2週間、基本計画の費用、飛行機のチケットと宿泊は準備する、そして週末



には私の希望する所に案内するというものであった。

ル・コルビジェ建築との出会い

2017年(63才)の誕生日翌日から2週間フランスに行くことになった。場所はジュネーブ近くのChevryという町で、スイスのジュネーブ国際空港から車で30分ほどの所、近くの丘に登るとスイスアルプスが一望でき、石造りの伝統的な建物の中で寝泊りしながら平日はプランを練り、週末には近郊のル・コルビジェの建物を見学するというまさに人生最高のパカンスを味わうことになった。

最初の週末はレマン湖の湖畔に立つル・コルビジェの「母の家」、翌日はル・コルビジェが生まれたLa Chauk-de-Fondsを訪ね10代後半で設計に関わったと言われているファレ邸・シュトツァー邸・ジャクメ邸・ジャンヌレ邸を見学する。現代建築の巨匠と評価されるル・コルビジェ



「SM-H」は、昭和27年に完成した住宅、72坪ほどの平屋で、当時の趣きそのまま残している。小屋裏の棟札に、棟梁の「引削清」氏の名前が確認できた。建築主の奥様(80代)のお話では、評判の大工さんであった。

2015年5月に計画がスタートし、打合せ、現場調査を重ね、同年10月に着工し、2016年8月に建物と外構が完成する。当初、梅雨前には植栽工事も含めて完成する予定であったが、工事途中での仕様見直し、外構の追加工事等があり、建物と外構が8月完成となり、植栽工事は夏を避け、涼しくなる10月に再開した。

基本計画にあたり、建築主から先代が作った建物を引き継ぎたい、そのためには建物の老朽化への対応、耐震性の向上、そして生活の利便性・快適性を望まれた。

築後65年建てているが、目視できる所での建物の痛みはほんのわずかである。ただし、ほぼ当時のままで使われているので、水回りの設備、建具の動き、断熱性、すきま風、等改善力所が多々考えられた。合わせて建築主(90代)が自家用車を必要とされなかったため、敷地内に駐車スペースが無く、また、道路から1.1mほど高くなっている敷地へのアプローチ等の考慮により、建物本体だけではなく、敷地全体を含めた改装となった。

8畳の床の間と6畳とのつづき間、そして東・南に縁側があった部屋を一つの部屋とし、北側から対面式の台所、食堂、居間、そして南側に主人の書斎コーナーを設ける。玄関ホール及び廊下との出入口は、以前の内法高さ(1.73m)としているが、台所の下がり壁、及び東、南側は建具無しで内法高さを2mとし、開放感を持たせた。天井は以前の棹縁天井をそのまま使用し、既存天井廻り縁の下に新たに廻り縁を設け小壁部分を大壁仕様に変更した。大壁に変更したのは、小壁部分での耐力壁確保、及び、塗り壁の下地処理と二つの目的がある。



が、その後の作風に大きな影響となった1911年の「東方旅行」以前に取り組んだ故郷の伝統的木造建築は大変興味深いものであった。

2度目の週末は南仏への1泊2日の旅、初日はラ・トゥーレット修道院を設計する時に参考にしたと言われている「ル・トロネ修道院」、私の本棚に「粗い石 ル・トロネ修道院工事監督の日記」があり、仕事で疲れた時に少しずつ読み進めていた。まさかその舞台となった「ル・トロネ修道院」に行くことになるとは想像だにしていなかった。次の日にはラ・トゥーレット修道院を見に行く。この時のことは私のブログ「柴睦巳・備忘録」のカテゴリー「モンブランの見える村から」で紹介している。

ひむかヘリテージ機構の世話人として

現在「ひむかヘリテージ機構」世話人の1人として、2019年から文化庁からの補助で毎年3、4回のペースでHM修了生を対象としたスキ

ルアップ講座を実施している。最も新しいところでは2025年3月に今後県内で登録有形文化財建造物の候補として取り上げられる可能性の高い、明治後期から戦後までに建てられた有力者の住宅をどのように評価すれば良いのかというテーマで、日本の近代住宅について詳しい内田青蔵氏を招いて講習会を実施した。

内田氏の最終講義テーマ(再考「洋風住宅」開拓史―「あめりか屋」を中心に―)の中で取り上げられた、大正時代の住宅改良運動の立役者であった「あめりか屋」の創業者「橋口信助」が宮崎県日南市飢肥出身であることは受講者にとって大変興味深いものとなった。

HM修了生と共に県内の歴史的建造物へ

2018年(64才)から都城市文化財保護審議会委員となり、2022年6月からは宮崎県文化財保護審議会委員も兼任し、地域の歴史的建造物の「発見・保存・活用」について取り組んでい

る。HM養成講習会を取りまとめた立場として、HM修了生が地域の歴史的建造物に関わる機会が少しでも増えることを願っており、その一つが2025年度から県内のHM修了生に呼びかけ、よりスキルアップしたHM修了生を県内各市町村の文化財保護審議委員会へ建造物担当委員として推薦できればと考えている。そのために宮崎県建築士会の「ヘリテージ委員会」の一委員としてこの取り組みを始めている。



柴睦巳 Mutsumi Shiba (1981年修士課程修了)

- 1954年 宮崎市生まれ
- 1973年 宮崎工業高校建築科卒業
- 1981年 工学院大学大学院修士課程修了
- 1982年 1級建築士取得(164857)
- 1990年 柴設計設立、現在に至る
- 1994年～2010年 南九州大学非常勤講師
- 2002年～2022年 都城高専非常勤講師
- 2014年～2016年 宮崎県建築士会HM養成講習会委員長
- 2018年～ 都城市文化財保護審議会委員、現在に至る
- 2022年～ 宮崎県文化財保護審議会委員、現在に至る



石場建て古民家の
限界耐力計算

による再生

橋本健一
橋本沢子



ARCHI-CONNNGEE [アーキコング] 一級建築士事務所

橋本 健一 Kenichi Hashimoto

- 1967年 生まれ
- 1989年 東京電機大学工学部建築学科卒業
- 1989年 (株)六角鬼丈計画工房
- 2000年 ARCHI-CONNNG一級建築士事務所設立
- 2012年 東京都文京区から「田舎暮らし」を体現すべく築120年の古民家(徳島県)に移住



ARCHI-CONNNGEE [アーキコング] 一級建築士事務所

橋本 沢子 Sawako Hashimoto

- 1967年 生まれ
- 1992年 工学院大学建築学科卒業
- 1994年 東京芸術大学美術学部建築科修士課程修了
- 1994年 (株)六角鬼丈計画工房
- 2000年 ARCHI-CONNNG一級建築士事務所設立
- 2004年~2009年 ものづくり大学非常勤講師
- 2012年 東京都文京区から「田舎暮らし」を体現すべく築120年の古民家(徳島県)に移住

ARCHI-CONNNGE 一級建築士事務所 主な受賞歴

- 2008年 「自然素材の家」日本漆喰協会 第3回作品賞受賞
- 2020年 「ナラベテマステ」四国経済産業省 ローカルクールジャパンの作品に選出
- 2020年 「ナラベテマステ」とくしま木づかいアワード 2020プロダクト部門 準グランプリ受賞

神山町の林業

四国山地の東部に位置する徳島県西郡神山町。豊富な森林資源と、木工家具や造船業が盛んであった徳島市に近い地理的条件を生かし、林業で栄えた町。明治時代の植林組合・木材協同組合の設立、大正時代には森林組合の設立など、古くから私有林業が営まれていた町である。

古民家の尺寸法

県からの委託で町内の耐震診断を十数件こなしていると、伝統構法を用いた田の字型平面の住宅では、尺寸法が330mm前後であることに

気付く。この母屋もまさに築年数100余年の建物で1間が1,970mmである。現代の木造建築で用いられるサブロク版(1,820mm×910mm)の尺寸法は明治期に導入されているので、全くその影響を受けていない。その昔、大陸から伝わった大工技術を、そのまま受け継いでいると思われる。

伝統的構法とは

土壁・貫・ホゾなどによる架構が大きな水平変位を可能にする「伝統的構法」に対し、「在来工法」は筋交いや構造用合板等の耐震壁が水平変位を最小限に抑える工法である。さらに大

きな違いは、前者は石の上に柱が建っているだけであり、後者は柱を金物で土台に緊結している。地震力などの水平力をどう逃がしていくかの考え方が「伝統構法」は「ねばり強く」外力を受け流し、「在来工法」は「かたく」外力に抵抗するという違いがある。

神領の家

槇の生垣に囲まれた敷地内には、母屋・蔵・馬屋を併設した離れの納屋などが並んでいる。いずれも土壁による伝統構法の建物であり、時間の重みを感じずにはられない。施主からの依頼は、利用方法の提案も含めた離れの改修

と、母屋の耐震設計であった。

母屋の改修方針

母屋は土葺き下地の本瓦である。南側の軒の出はかなり深いにもかかわらず垂木先端が下がっていない。小屋裏に入ると枯木構造に似た補強があり、出桁の加工などに工夫がみられた。耐震評点を上げるための屋根の軽量化は母屋の場合、とてもナンセンスと感じたので、的確に補強計画を行うために、限界耐力計算による耐震設計が必須であり、またそれを実現させるために、地域の古い民家をよく知る工務店に依頼する必要があった。

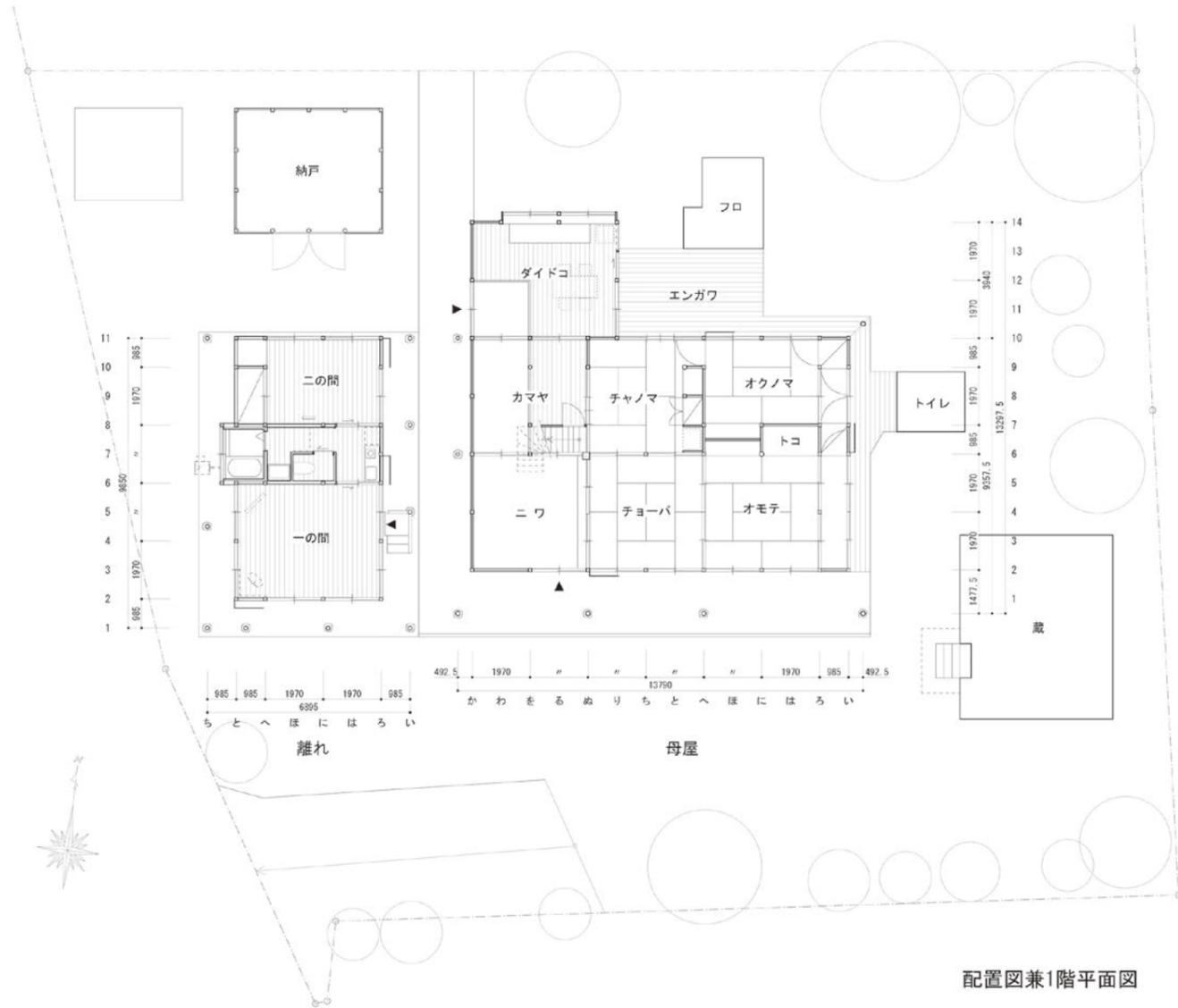
貫が入った土壁は耐力こそ低いものの、許容変位が大きい(軸組耐震性能グラフ参照)垂れ壁などの確に評価しながら全体の耐震性を判断する。耐震壁の枚数にとらわれてしまうと、上手くまとめられないので難しいところである。しかし地震動の伝搬が小さい第1種地盤であったことが有利に働き、瓦を降ろすことなく、最小限の改修で良い計算結果を得ることができた。

もう一つの特徴が、後で増築された2階の柱は全て管柱であること。そして2階の外壁ラインが1階より3/4間内側に入っている。まるで法隆寺の五重の塔のような重ね方が、全体の独特なプロポーションを可能にしている。実はこのスタイルの古民家が神山町には何軒かあって、継

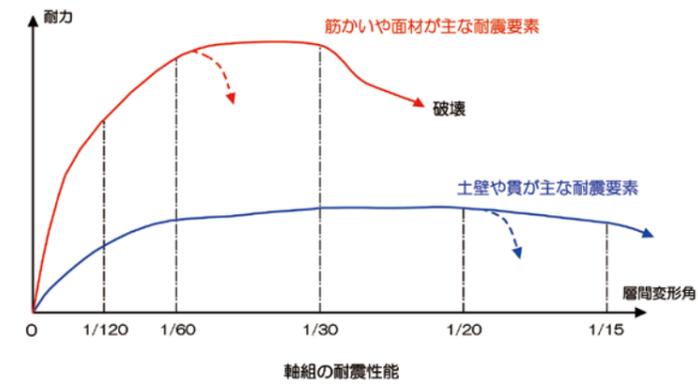
承してきたであろう大工技術の高さを見ることができる。

離れの改修方針

母屋に対して離れの保存状況は、あまり望ましくなかった。全体的な傾斜なども有る事から、耐震的に有効な2階の減築と新規小屋組み・下屋底の付替え、更に全体的に土壁のやり替えなどを行った。既存の軸組みを利用しながら難易度の高い計画である。母屋・離れ・蔵と敷地全体のバランスを模型で検討しながら、背景の山の稜線に呼応する山間地の風景の一部となるよう心掛けた。



配置図兼1階平面図



軸組の耐震性能



石場建て



竹木舞(離れ一の間)

工事が進むなか棟梁からの話では、古い材料は同じ杉でも年輪が詰まって、とても高級な材が使われているとのことだった。さすが木材の生産地ならではのゆえに傷んでいる部分は付替えたりしながらできるだけ既存の軸組みを使っている。

土壁について

大工仕事と並行して、左官仕事が伝統的構法による改修において重要である。木舞下地の竹や荒壁土の確保、角又を用いた保水調整・中

塗り・漆喰仕上げまで、ひと昔前ともいえる伝統技術を見ることができた。温熱環境に着目した土壁の特徴として、熱容量が大きく室内温度の変化を小さくすることができる。また、優れた調湿機能により、吸放湿性が大きい土壁は、室内湿度が安定するため、体感温度などの快適性をより良いものにできるという特徴をも持つ。

伝統的構法のありかた

母屋の棟札を確認すると「大正拾貳年」関東大

震災の1923年であり、とても印象深い。

最後に当時中学2年生の黒澤明監督が、関東大震災での体験を綴っている部分を引用する。

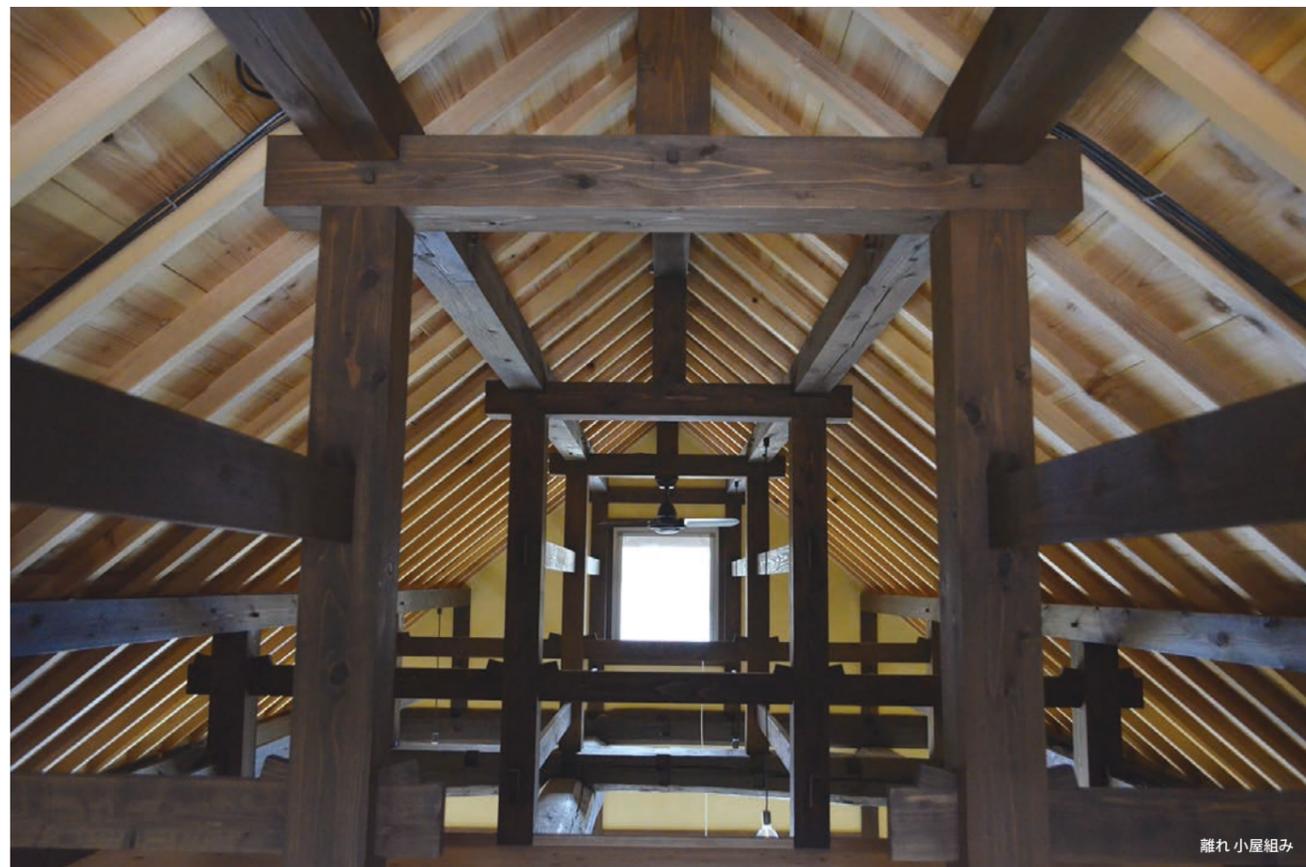
「すべての家の屋根瓦は、ふるいにかけてようにゆずられて踊るように跳ね動き、我さきに屋根から滑り落ちて、屋根の木組みを濛々たる土埃の中にさらけ出した。成程、日本の家はうまく出来ている。これなら、軽くなって家はつぶれない。」
【蝦蟇の油 自伝のようなもの】より



母屋 南側立面



離れ 小屋組み



離れ 小屋組み



離れ 南側軒先をみる



伊藤文四郎 回顧展

香川 浩

(工学院大学建築系同窓会副会長、建築家/スタジオ香川)

昭和の初めに活躍した建築家、伊藤文四郎の回顧展が、伊藤の故郷長野県駒ヶ根市東伊那公民館で開催された(2024年11月23-29日)。これまで断片的な情報があるだけで、存在をほとんど知られていない人物であったが、近年の大きな発見が再評価の動きに繋がり展示会が実現した。発見のひとつは、伊藤の実家から手記や図面等の資料が見つかったこと、もうひとつは建築界で広く知られている写真に伊藤本人が写っているのが明らかになったことである。また回顧展を記念して、オープン初日に建築史家の藤森照信先生と筆者による講演会が駒ヶ根市赤穂公民館ホールで行われた。



【写真1】帝国ホテル設計中のフランク・ロイド・ライトと伊藤文四郎(右端) 右上に“TO ITO FLW”とライトのサインが入っている。:磯崎真知子氏所蔵



【写真2】旧赤穂村役場（現郷土館）、伊藤文四郎設計

伊藤文四郎は1882年(明治15年)長野県東伊那村(現駒ヶ根市)生まれ。製糸業を営む裕福な家庭環境にあったが、事業に失敗し通っていた尋常中学校飯田支校を中退。家の再興を期し上京し鉄道員となるも勤務中の事故で怪我を負ったことを転機に工手学校(工学院大学の前身)で建築を学び1900年に卒業。ついに建築界入りして各地の営繕課で働くが、ほどなく始まった日露戦争の影響で納得ゆく仕事が出来なくなった。ここで伊藤は「渡米して一労働者となり生家を救う」決断をする。これを「果たさなければならぬ重い使命」とも表現している。渡航先はサンフランシスコで、現地で開業している日本人医師の補償で旅券を得た。英語がほとんど出来なかった伊藤は、このとき21歳であったが小学校(7年生)に編入、高校を経て1914年には州立カリフォルニア大学を卒業し、同年にカリフォルニア州公認建築士となった。伊藤は実力をつけアメリカに定着し、建築の仕事をしたのである。

なお、アメリカに渡って2年後の1906年に、伊藤のキャリアを決定づける出来事があった。サンフランシスコ地震である。被害状況の視察に、帝大教員の中村達太郎と佐野利器が来ることを知った伊藤は、現地でのアテンドを申し出た。中村には工手学校時代に教わっていたはずで、佐野も後年に工手学校教員となっている。渡米当初は日本

に帰る気も無く、実家への送金を続けるつもりだった伊藤は、父親の死をきっかけに1916年(大正5年)に帰国することになるが、日本で仕事をするにあたって、工手学校の人脈が活かされることになる。

日本に帰国後、伊藤が最初に建築メディアに登場するのは、『建築世界』(1916年10月)に掲載された「松岡齒科医院」で、これは母親の家系(歯科医師)による仕事と思われる。そして次に『建築画報』(1917年11月)に掲載されたフランク・ロイド・ライトの記事中に伊藤の名前がある。「帝国ホテル」計画案の初出であり、ライトの主要作品とともに帝国ホテル模型が掲載され、文末の謝辞にライト、林愛作、遠藤新に続いて伊藤文四郎とある。同記事中にライトのポートレートも掲載されているが、このとき同じ場所で撮って撮った写真が、ライトと遠藤新が写ったものとして広く知られている(写真1)。左からライトの息子ジョン、遠藤、ライト、そして伊藤文四郎なのだが、長い間に伊藤ではなく林愛作として定着してしまっていた。近年になって伊藤の親族が指摘し、ライト財団などのキャンペーンも伊藤文四郎として訂正されたところである。この写真は2枚存在し、遠藤と伊藤に宛てたライトのサインが入ったものを、それぞれが所有していた。今回の回顧展ではこの2枚が展示された。

ライトの元で伊藤が具体的に何をしていたのか不明であるが、現在のところライトの補佐であったと考えられている。よく知られているように、帝国ホテルの支配人となった林愛作は元古美術商で建築実務に不案内であったから、様々な局面で帝国ホテルの設立者である大倉喜八郎を頼っていた。大倉は工手学校の賛助員であり、工手学校首脳陣とも顔見知りであったことから、日米の建築に通じた伊藤文四郎が帰国したことを知り、ライトの補佐として起用したのではないかと推察される。日本ではほとんど実績のない伊藤を推す存在があったとすれば、工手学校関係者であったであろう。写真が撮られたのは1917年、ちょうど帝国ホテルの設計が完了した段階である。ライトはメディア発表記念の意味でサイン入りの写真を遠藤と伊藤に渡したのだろう。このとき参画して間もない若手の遠藤は、次の仕事が決まっていた伊藤と入れ替わる格好になった。

次に伊藤は丸の内の「郵船ビルディング」(設計:曾禰中條建築事務所)の工事監督を担当した。曾禰達蔵も工手学校の師であり、施工を担当する米国フラー社に対応出来る能力を持つ伊藤への依頼であったと思われる。設計者側のインスペクターつまり現在の施工監理に相当する仕事は、伊藤にとって建築設計と並んで重要な仕事になってゆく。なお曾禰とは私的にも交流が続き、回顧展では書状が展示された。そして、ついに郷里の赤穂村役場の設計を担当することになる。こちらは木造の端正なルネサンス様式で、伊藤が学んだ当時のアメリカでの建築教育を反映したものだろう。藤森照信は今回の講演で「旧赤穂村役場には、日本で最も美しいパラディアン・ウィンドウがある」と評した。旧赤穂村役場は駒ヶ根市郊外に移築され、郷土館として現存している(写真2)。ほかにも伊藤は故

郷でいくつかの仕事を手掛けており、家を再興する使命を果たしたと言えるだろう。偶然にも帝国ホテル、郵船ビルディング、赤穂村役場は、1923年(大正12年)に竣工した。関東大震災の年である。

伊藤は震災復興の意味を持つ仕事として「帝国大学図書館」(1928、設計:内田祥三)の工事監督、「工手学校新宿校舎」(1928、設計:堀越横山建築事務所)の臨時工事部長を担当した。また1920年(大正9年)には日本大学高等工学校の初代校長となった佐野利器に講師として招かれている。

今回の回顧展をきっかけに、駒ヶ根市では伊藤文四郎への関心が高まっているようで、新たな資料が発掘されているそうである。伊藤文四郎の仕事の全容について、あらためて同窓会誌にて報告したい。



藤森照信先生の講演

伊藤文四郎回顧展

期日:2024年11月23~29日
会場:駒ヶ根市東伊那公民館

伊藤文四郎回顧展記念講演会

期日:2024年11月23日
会場:駒ヶ根市赤穂公民館ホール
講師:藤森照信(工学院大学特任教授)、香川浩
後援:工学院大学建築系同窓会、日本大学桜門建築会、
DOCOMOMO Japan

2023年度 同窓会賞

数値で測れないものの評価基準は人それぞれです、さまざまな視点や価値観、評価軸により、同じものを見ていても評価は異なります。同窓会では、学内審査とは異なる視点から学生の制作の成果を評価したいと考えています。

審査委員(設計):栗原健太郎 審査委員(論文):石川雅博、中村孝明、香川浩

- 設計**
 - 【最優秀賞】 田部 優生 松柏の國 碎石場への森林償還と7つの建築
 - 【佳作】 木下 拓翔 湖水と三方草 ヨシが織りなす四季をめぐる空間の提案
 - 【佳作】 菅野 大輝 額縁から見る 建築の作品化による街道沿いの分散型展示廊
- 論文 技術系**
 - 【最優秀賞】 古池 遼太 廃棄衣類繊維を使用した断熱材の試作及びCO₂ 排出量削減効果に関する研究
 - 【佳作】 菅原 颯真 木造軸組工法建築物における構造特性係数Dsに関する解析的研究
- 論文 計画系**
 - 【最優秀賞】 筒井 瑚南 リンクとプレイスの機能から見た路地の保全意義に関する研究
～日本橋、神田を対象として～
 - 【佳作】 深澤 晴香 障害者福祉施設の業務継続と福祉避難所の運営に関する研究
～新宿区でのケーススタディー～

卒業研究(論文・技術系)
審査講評 審査員:栗原健太郎

卒業研究(論文・技術系)
審査講評 審査委員:石川雅博、香川浩

卒業研究(論文・計画系)
審査講評 審査委員:石川雅博、香川浩

最優秀賞 田部優生
松柏の國 碎石場への森林償還と7つの建築

森林に囲まれた山中から石材を切り出す東北に実在するの採石場について、時代とともに廃れてしまった裸山の現況に建築を点々と作り同時に植林もする計画。池のある山の様々な場所に建築するので場所によって地形との関りが異なること、それぞれが離れているので次の建築まで散策することで山をより感じられること、植林によって元の山に戻っていくという時系列を含んでいること、が素晴らしかった。改善点としては少し建築形態が自立し過ぎており環境との相互作用が少ないか。

佳作 木下拓翔
湖水と三方草 ヨシが織りなす四季をめぐる空間の提案

主役であるヨシを表現した模型の訴えかけの力が最も高かった。琵琶湖の湖畔に「ヨシ」成長段階から刈り取り加工するまでの時系列で生活空間とどのように結びつくかを表現した。模型も図面もプレゼンは素晴らしかった。実現される広大な風景として何なのかが言えればなお良いか。

佳作 菅野大輝
額縁から見る 建築の作品化による街道沿いの分散型展示廊

中山道の桶川宿だった町に残る古い建物を壊さずにリノベーションして残していく計画。何を残し何を残さないかを判断し寸法取りもするために現地調査をつぶさに行ったという。他の案と比べて調査に裏打ちされた具体性が積み出ているのがとても良い。その反面、逆に構造・法律・コスト等が気になってしまったか。

最優秀賞 古池遼太
「廃棄衣類繊維を使用した断熱材の試作及びCO₂排出量削減効果に関する研究」

本論は、衣類の大量廃棄が問題視される中、これらを建築材料としての断熱材にリサイクル利用することで、CO₂ 排出量の削減に資することを明らかにした研究である。具体的には、廃棄衣類繊維を使用した断熱材のCO₂ 排出量と、一般的な断熱材のそれとを、断熱材1m³分で算出し比較をしている。時宜を得た研究であるとともに、一定の結果を得ており、完成度は高い。一方で概算部分が見られることから、引き続きの研究が望まれる。

佳作 菅原颯真
「木造軸組工法建築物における構造特性係数Dsに関する解析的研究」

本論は、木造建築物を対象に、P-Δ効果を考慮した場合とそうでない場合の地震時の安全性について、比較検討している。具体的には、木造軸組工法1~5階建ての簡易モデルの下、増分解析による各階Dsの比較、ならびに基準法で定められている応答スペクトル適合波による時刻歴解析を行い、層間変位を比較している。新規性は必ずしも認められないものの、木造建築物のみならず、耐震設計に関する深い理解と研究の足跡が見受けられる。

最優秀賞 筒井瑚南
リンクとプレイスの機能から見た路地の保全意義に関する研究
—日本橋、神田を対象として—

誰もが街並みの魅力的な要素として感じる路地について、日本橋と神田を例に「リンク」と「プレイス」という視点でその特性を分析し、保全の意義を明らかにしている。まちづくりの実践において、演繹的な思考に陥りやすい大きな計画論だけでなく、曖昧だが魅力的な路地という要素を、個性の異なる街を題材としながら、有用なツールとして扱い易くまとめている。これを具体的な計画に展開することを期待したい。

佳作 深澤晴香
障害者福祉施設の業務継続と福祉避難所の運営に関する研究
—新宿区でのケーススタディー—

近年の災害対応において、より細やかな対応が求められる障害者福祉施設と福祉避難所について、その運営実態について丁寧に調査した研究である。これまで経験の無い災害が起こり得ることを、誰もが認識しつつある中で、このような研究を継続していくことは、大いに意義がある。ここで得た学びが社会に還元され、より多くの人々の助けになることを期待したい。

設計 [最優秀賞]

松柏の國 碎石場への森林償還と7つの建築

田部 優生

タイトルにある「松柏」とは苦しい逆境でも信念や志を貫く意を指す。人の手によって破壊された山には森を、災害により被害を受けた町には人を取り戻すために、碎石場の森林再生を行いながら7つの建築を建て地方創生を目指す提案である。



震災復興を支えた裸山に自然を還し7つの建築が紡ぐ世界により災害の記憶伝承と加速度的な地方創生を目指す提案

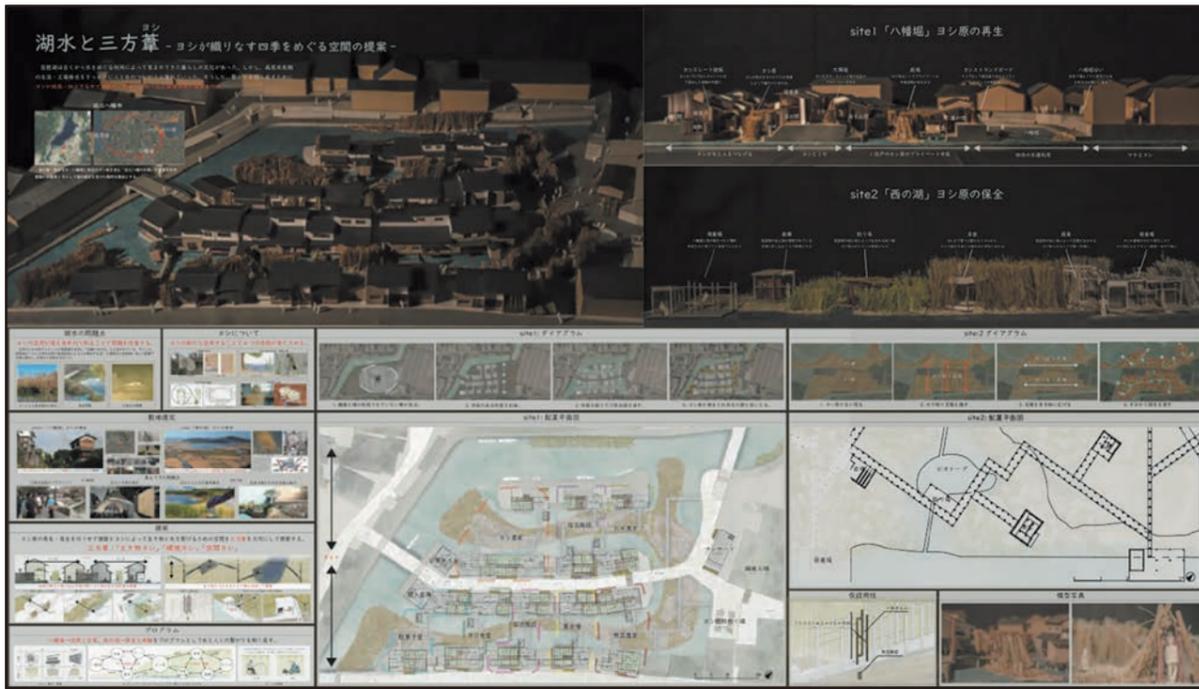


設計 [佳作]

湖水と三方葎 ヨシが織りなす四季をめぐる空間の提案

木下 拓翔

琵琶湖は古くから水との暮らしの文化があった。しかし、高度成長期をきっかけに人と水のつながりは薄れていった。当時の水とのつながりを取り戻すためにヨシが成長・加工する中で建築の一部として取り込みヨシによる資源環境の提案を行う。



設計 [佳作]

額縁から見る 建築の作品化による街道沿いの分散型展示廊

菅野 大輝

残してきた建築の新たな価値と経験を発見するため、現代的な視点「額縁」から建築そのものを作品として鑑賞する。点在する作品は街道沿いをギャラリー化し、人々が散策することで、桶川そのものを再発見していく分散型展示廊。



論文技術系 [最優秀賞]

廃棄衣類繊維を使用した断熱材の試作及びCO2 排出量削減効果に関する研究

古池 遼太

Research paper content including abstract, introduction, methodology, results, and conclusion regarding recycled clothing fibers as insulation.

Research paper content including material composition tables, experimental procedures, and CO2 emission reduction results.

Research paper content including CO2 emission comparison charts and experimental results for different insulation materials.

Research paper content including CO2 emission comparison charts and experimental results for different insulation materials.

白樺湖 夏の家

歳時記
2024



会員が増えたこともあり、2024年の夏はほぼ全週末に滞在者がいるくらい白樺湖夏の家は活況でした。そのおかげか夏の家はとてきれいで快適に過ごすことができました。今年から湖畔の日帰り温泉施設が使えなくなりましたが、車で少し降りると露天風呂もある「河童の湯」などがあり、茅野市の新たな魅力を発見することができました。また私たち家族は最も暑い時期に滞在

させて頂きましたが、夜は長袖が必要なくらい涼しく、猛暑を忘れさせてくれるひと時となりました。そしてちょうど白樺湖花火大会の時期と被り、湖面に映る半円の壮大な花火は見ものでした。日程調整や掃除、備品の引継ぎなど皆さまの思いやりに感謝しつつ、今後も未永く白樺湖夏の家が続くことを願っております。

平山 由佳理(工学院大学建築学部まちづくり学科准教授)



白樺湖夏の家は、学生たちの発案から計画され、アルヴァ・アアルトに師事した武藤章先生によって設計された貴重な建築です。工学院大学の建築教育のレガシーとして動態保存し、建築文化への貢献をめざしています。建築保存の趣旨に賛同いただける方の新規入会もしくはご寄付を募りたいと存じます。どうか多数の方々のご賛同を賜りますよう、心からお願い申し上げます。ご関心のある方は同窓会までご一報ください。

「白樺湖 夏の家」会員規約

1. 名称

本会の名称は、「白樺湖 夏の家」とする。

2. 目的

- (1)故武藤章設計の建築を長く維持・監理し、武藤章の北欧建築・デザインの精神に学ぶ。
- (2)白樺湖夏の家を拠点に白樺湖のまちづくりに参画し、北欧の暮らしに学ぶ環境づくりに貢献する。

3. 事業

本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1)故武藤章設計の工学院大学白樺湖学寮を学園から引き継ぎ、工学院大学建築系同窓会が会員制施設として維持、運営する。
- (2)前号に附帯する一切の事業施設利用に関する規約は別に定める。本会の事業年度は4月1日より3月31日までとする。献する。

4. 会員資格

工学院大学校友会会員および工学院大学教職員であること。

5. 会員の種類と会費

本会は、本会の目的、事業内容に賛同した「建築を保存する会(正会員)」および「建築の保存を支援する企業の会(企業会員)」から成る。

- (1)「建築を保存する会(正会員)」
 - ・入会時寄付金:300,000円、維持監理協力費:12,000円/年
 - ・施設利用料:無料、同伴者:無料
 - ・定員:25
- (2)「建築の保存を支援する企業の会(企業会員)」
 - ・入会時寄付金:500,000円、維持監理協力費:120,000円/年
 - ・施設利用料:無料、同伴者:無料
 - ・定員:5

6. 入会方法

- ・入会申込書の提出。
- ・役員による入会審査および承認。

7. 施設使用原則 (詳細は別に定める)

- ・会員は夏の家を自分の別荘だと思って大事に使用すると同時に、会員同士が快適に過ごせるように考えて行動する。
- ・夏の家の伴は、自己責任のもと会員各自が保持する。
- ・事前に予約の上、会員自ら解錠して使用する。
- ・次に使用する会員のために自ら清掃して、持ち込んだモノは一切残さず、会員が消灯・施錠

8. 役員

本会の役員として代表1名、副代表1名を置く。

- (1)代表は建築系同窓会会長とする。副代表は建築系同窓会副会長とする。
- (2)代表は本会の業務の全てを管理する。但し、代表が必要と認めた場合、他の会員に一部業務を代行させることができる。

9. 任期

代表の任期は、工学院大学建築系同窓会会長、副会長の任期とする。

10. 財源

本会の事業に要する資金は、正会員、企業会員の入会時寄付金、維持監理協力費、および寄付金をこれに充てる。ただし、不足の際は工学院大学建築系同窓会がこれを負担する。

11. 会計

本会の会計は工学院大学建築系同窓会の事業として計上されるものとする。本会の会計年度は4月1日より3月31日までとする。

12. 届出事項の変更

会員は、入会申込所にある氏名、住所等に変更が生じた場合は、ただちに代表に届け出る事とする。

13. 退会

代表への退会届けの提出をもって退会とする。会員の退会は何人も是を妨げてはならない。

14. 解散

本会の解散については、正会員と企業会員の合議による。本会の解散にともなう残余財産の清算については建築系同窓会に移管する。

15. 会員間の連絡

会員間の連絡はEメール、電話等で行う。

16. 所在地

本会の所在地を下記の通りとする。
工学院大学 新宿校舎26階
鈴木敏彦研究室 〒163-8677
東京都新宿区西新宿1-24-2に置く。

17. 公告の方法

当会の公告は、工学院大学建築系同窓会HP (<http://niche-alumni.com/>)にて電子公告で行う。

18. 設立日

本会の設立日は、平成28年4月1日とする。本規約は、平成28年4月1日より発効とする。この規約の記載内容について事実と相違ないことを証明する。

代表 工学院大学建築系同窓会会長
高木雅行

建築系同窓会振込先

銀行名：みずほ銀行
支店名：新宿西口支店
普通口座
口座番号：1029061
名義：工学院大学建築系同窓会
会長：高木雅行



△お問い合わせは
こちらから！！

日建学院と叶えるあなたの“夢”
あなたの夢、
応援します。

工学院大学OB・OG向け特別学費のご案内

日建学院では様々な資格に挑戦される方への
試験対策講座をご用意しております。

①1級建築士学科本科 (通学)

通常学費：¥770,000 (税込)

特別割引
¥695,200 (税込)

②1級建築士学科理論 (Web)

通常学費：¥330,000 (税込)

特別割引
¥165,000 (税込)

③2級建築士学科本科 (通学)

通常学費：¥473,000 (税込)

特別割引
¥381,700 (税込)

④2級建築士学科理論 (Web)

通常学費：¥330,000 (税込)

特別割引
¥156,200 (税込)

⑤1級建築施工管理技士 一次 (通学)

通常学費：¥308,000 (税込)

特別割引
¥256,300 (税込)

⑥1級土木施工管理技士一次 (通学)

通常：¥308,000 (税込) ⇒ ¥256,300 (税込)

⑦2級土木施工管理技士一次・二次 (通学)

通常：¥308,000 (税込) ⇒ ¥238,700 (税込)

⑧宅地建物取引士重点 (Web)

通常：¥110,000 (税込) ⇒ ¥88,000 (税込)

⑨BIM入門講座 (Web)

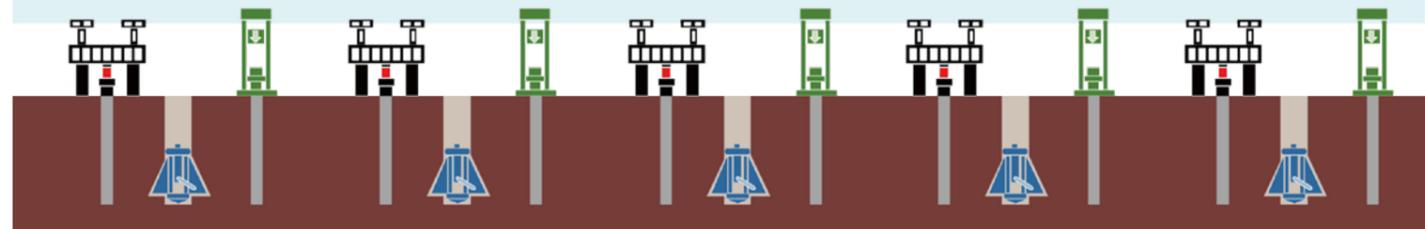
通常：¥11,000 (税込) ⇒ ¥6,600 (税込)

ご相談窓口：日建学院新宿校 (03-6894-5800) 担当：細勢

見えないところで支えています



システム計測株式会社





フジタと描く、未来のカタチ。

私たちフジタは、お客様や社会が思い描いている未来を想像し、
 その実現に向かって、共にカタチにしていきます。
 土木・建築の枠を超えて、まちづくりをサポートし、
 そこに暮らす人々にとって本当に価値あるものを創り続けることが
 私たちの使命だと考えます。
 大和ハウスグループの一員として、
 広い視野を持ち、グローバルに展開してきたフジタ。
 たゆまず進む私たちに、どうぞご期待ください。

FUJITA

 Daiwa House Group®



耳を澄ませば、
未来の音が
聴こえてくる。

熊谷組は、
土木・建築の
これからの
創造しています。

脱炭素化に向けた
中高層木造建築や、
災害時にも役立つ
無人化施工の
技術など、

環境と人に
優しい、未来の
まちづくりへと、
歩みはじめています。

未来を
信じて。

Believe.

高める、つくる、そして、支える。



熊谷組



わたしたちは、
構造計算適合性判定業界の
リーディングカンパニーとして
社会に貢献しています。

創業者	田野邊 幸裕 (昭和 44 年卒)
取締役会長	井上 保夫 (昭和 51 年卒)
取締役	谷口 宗彦 (昭和 44 年卒)
監査役	平野 久雄 (昭和 41 年卒)
顧問	田中 栄作 (昭和 54 年卒)
執行役員	

構造に興味のある方一緒に働きませんか？

構造計算適合性判定員と補助員を募集しております。

03-6413-5771 (管理部) までご連絡ください。



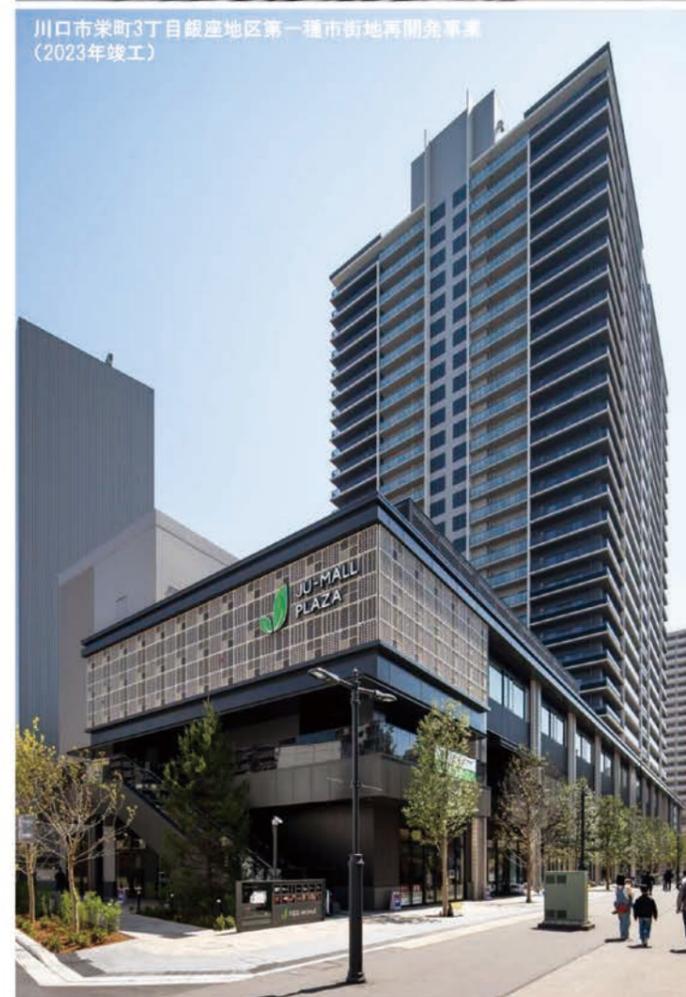
指定構造計算適合性判定機関 / 登録建築物エネルギー消費性能判定機関

株式会社 **建築構造センター**

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-8-1 大橋御苑駅ビル6階 TEL: 03-6413-5777



中野区庁舎 (ZEB Ready認証取得)
(2024年竣工)



川口市栄町3丁目銀座地区第一種市街地再開発事業
(2023年竣工)

100年企業に向けて、
さらなる進化と深化を。



千葉公園総合体育館「YohaS(よはす)アリーナ」
(2023年竣工)



代表取締役社長
加藤 朋行 (1986年工学院大学大学院卒)
本社: 〒112-0001 東京都文京区白山3-1-8

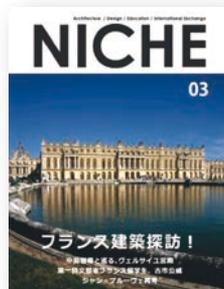
Back Numbers



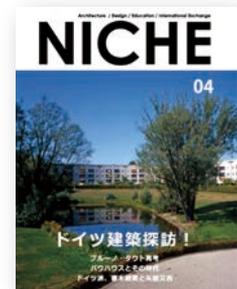
NICHE mook 01
世界に羽ばたけ!
 イギリスハイブリット留学2013
 ミラノ工科大学国際交流2011-2013
 2014年3月31日発行/214ページ
 日英バイリンガル/ISBN 978-4-907469-00-9
 定価:本体1,200円+税



NICHE mook 02
台湾建築探訪!
 台湾のフジモリ建築
 知られざる梅沢捨次郎の仕事
 2015年3月31日発行/248ページ
 日台バイリンガル/ISBN 978-4-907469-02-3
 定価:本体1,800円+税



NICHE mook 03
フランス建築探訪!
 中島智章と巡る、ヴェルサイユ宮殿
 第一回文部省フランス留学生、古市公威
 ジャン・ブルーヴェ再考
 2016年7月14日発行/282ページ
 日仏バイリンガル/ISBN 978-4-908390-01-2
 定価:本体2,400円+税



NICHE mook 04
ドイツ建築探訪!
 ブレーノ・タウト再考 バウハウスとその時代
 ドイツ派、妻木頼黄と矢部又吉
 2017年8月14日発行/282ページ
 日独バイリンガル/ISBN 978-4-908390-02-9
 定価:本体2,400円+税



NICHE mook 05
イタリア建築探訪!
 辰野金吾のグラントツアー
 JOE COLOMBO 1952-1971
 永遠の都ローマ
 2017年8月14日発行/253ページ
 日伊バイリンガル/ISBN 978-4-908390-04-3
 定価:本体2,400円+税



NICHE mook 06
プラハ、ウィーン、ブダペシュト建築探訪!
 キュビズム建築とプラハ
 ロース、ヴァーグナー、ホフマンとウィーン
 レヒネル・ウドゥンとブダペシュト
 2019年12月20日発行/262ページ
 日英バイリンガル/ISBN 978-4-908390-07-4
 定価:本体2,800円+税



NICHE mook 07
サルデーニャへ!
 地中海の中心に浮かぶ島
 サルデーニャの中近世
 脱成長の建築のゆくえ
 2020年12月1日発行/244ページ
 日伊バイリンガル/ISBN 978-4-908390-09-8
 定価:本体2,800円+税

NICHE(ニッチ)

「ニッチ」とは、イタリア語では「ニッキア」(nicchia)といい、フランス語の「ニーシュ」(niche)を経て、同じ綴りのまま英語の「ニッチ」となった。日本語では「壁龕(へきがん)」という。古典主義建築のファサードや壁面に施された窪みを意味する。ラテン語の「巢」を意味する「ニドゥス」(nidus)に由来するという説や、半球形となっている頂部が貝殻模様で装飾される場合もあることから貝殻を意味するイタリア語「ニッキオ」(nicchio)を結びつける説もある。この空間には古代ギリシア・ローマ神話の神々やニンフ、ローマ皇帝などの彫像が置かれた。転じて、教会堂内における聖体(キリストの血と肉であるワインとパン)を置く同様の空間や、近世の宮殿や貴族住宅における寝台を収めるアルコーブを指すようになった。「NICHE」という書名には、大学の知的資源が溢れ出る窪みでありたいという願いを込めている。

※02はAmazon、その他はAmazonと全国書店でお買い求めいただけます。

NICHE編集部

高木雅行(編集長)、大塚 篤、香川 浩、楠 昭、新海俊一、土屋和夫、
 中島智章、平井 充、類田 環、長沼和也、山本 玄

工学院大学建築系同窓会誌
NICHE 2025 vol.48
 発行日 2025年5月16日
 発行 工学院大学建築系同窓会
 会長 高木雅行
 所在地 東京都新宿区西新宿1-24-2
 (一社)工学院大学校友会
 TEL.03-3342-2064
 編集・制作 NICHE編集部

<http://niche-alumni.com>

工学院大学建築系同窓会誌「NICHE」のバックナンバーは、こちらから閲覧することができます。



NICHE(電子版) 広告出稿のご案内

掲載	工学院大学建築系同窓会誌 NICHE 2026 vol. 49	
発行日	2026年3月下旬(予定)	
広告掲載	A. 表紙裏	1頁【180,000円】
	B. 表紙裏の対向	1頁【160,000円】
	C. 裏表紙の内側	1頁【150,000円】
	D. 中面	1頁【100,000円】
申込締切	2026年1月13日	
サイズ	天地297mm×左右210mm	
広告データ入稿締切	2026年1月23日	
お申し込み・お問合せ先	jimukyoku@kogakuin.or.jp	

* 申込書が必要な方はご連絡ください。